

第4章 熟議への意識と地域の課題

～安心・安全を創るための地域のちからを巡って～

1. 参加者への「熟議」アンケートの概要

討議型世論調査の方式を参考に、兵庫大学の熟議では、参加者に対し、事前のアンケートと事後のアンケートを課しており、その比較を行うことによりテーマに対する参加者の意見が、熟議の前後でどのような変化をするか検証が可能である。これまでの熟議でもアンケート調査を実施してきた。その場合、例年共通して熟議や討議といった熟議手法に関する質問を設ける他、それぞれの年度毎のテーマに関する質問項目も用意をしている。特に、テーマに関する質問については、事前、事後のアンケートで共通させており、その差を熟議によつての意見の変化として明らかにする。

「熟議 2015 in 兵庫大学」においても、この方針を引き継ぐ。具体的なアンケートの設問作成は、田端の原案を踏まえ熟議プロジェクトチームで作成、結果の統計分析は同チームの森下が行った。

(1) 回答の回収数

「事前アンケート」、「事後アンケート」の回答の回収状況の概要を示しておく。

「事前アンケート」の回収数は、80件であり、「事後アンケート」の回収数は77件である。当日の参加者は、77名であった。事前に回答しながら参加しなかった方もあった。両アンケートに共通し、個別にマージが可能になる回答者数は73名であった。「事前アンケート」「事後アンケート」の比較はこの集団を対象とする。

(2) 属性別の回答状況

属性として、まず参加者の性別での構成を示す。性別では、男性が2/3、女性が1/3を占めている。これは過去の熟議の比率とほぼ同様である【表4-1-1】。

| | 事前アンケート | | 事後アンケート | |
|----|---------|--------|---------|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 男性 | 54 | 67.5% | 50 | 64.9% |
| 女性 | 26 | 32.5% | 27 | 35.1% |
| 計 | 80 | 100.0% | 77 | 100.0% |

表4-1-1 性別の回答数

次に、生年月日より計算した年齢階級別の比率を示す【表 4-1-2】。年齢階級では、「20歳未満」が事前で6割を占めている。兵庫大学での熟議では、多様な年齢層の参加者による議論を重視しており、これまでも地域内の高等学校に対し積極的に参加の声掛けを行ってきた。学生の参加もあることから、類似する事業の中ではこの年代の参加率は高く、「熟議 2013 in 兵庫大学」ではおよそ40.0%、翌年の「熟議 2014 in 兵庫大学」でおよそ45%であり、徐々に数字が上昇している。今回の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、例年よりもこの年齢層の参加者が多くあった。熟議による教育効果の評価が高等学校の間で高まっており、参加を決めた学校が多かったと考えられる。次に「20歳以上、40歳未満」の割合がおよそ20%を占めており、ここには兵庫大学の学生も含まれている。さらに「60歳以上」も15%以上を占めている。

| | 事前アンケート | | 事後アンケート | |
|-------------|---------|--------|---------|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 20歳未満 | 48 | 60.0% | 42 | 54.5% |
| 20歳以上、40歳未満 | 15 | 18.8% | 17 | 22.1% |
| 40歳以上、60歳未満 | 5 | 6.3% | 6 | 7.8% |
| 60歳以上 | 12 | 15.0% | 12 | 15.6% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 計 | 80 | 100.0% | 77 | 100.0% |

表 4-1-2 年齢階級別の回答数

所属別では、前述の通り「高等学校（高校生）」が最も多く、42件で過半数を占める。次いで「大学（大学生）」が10件、12.5%である。学生、生徒が2/3を占めている結果である。アンケート結果を読み解く場合には、若年者が多い点に注意が必要である。学生、生徒以外では、「自治体・政府（公務員）」が9件、11.3%となっている【表 4-1-3】。

| | 件数 | 比率 |
|-------------|----|--------|
| 高等学校（高校生） | 42 | 52.5% |
| 大学（大学生） | 10 | 12.5% |
| 民間企業 | 4 | 5.0% |
| 自治体・政府（公務員） | 9 | 11.3% |
| NPO・各種団体 | 5 | 6.3% |
| その他 | 6 | 7.5% |
| 無職 | 4 | 5.0% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% |
| 計 | 80 | 100.0% |

表 4-1-3 事前アンケートでの所属別の回答数

2. 議論に臨む考え方と熟議への評価

(1) 議論への評価

熟議など議論の経験について、事前アンケート（N=80）を対象に分析をする。

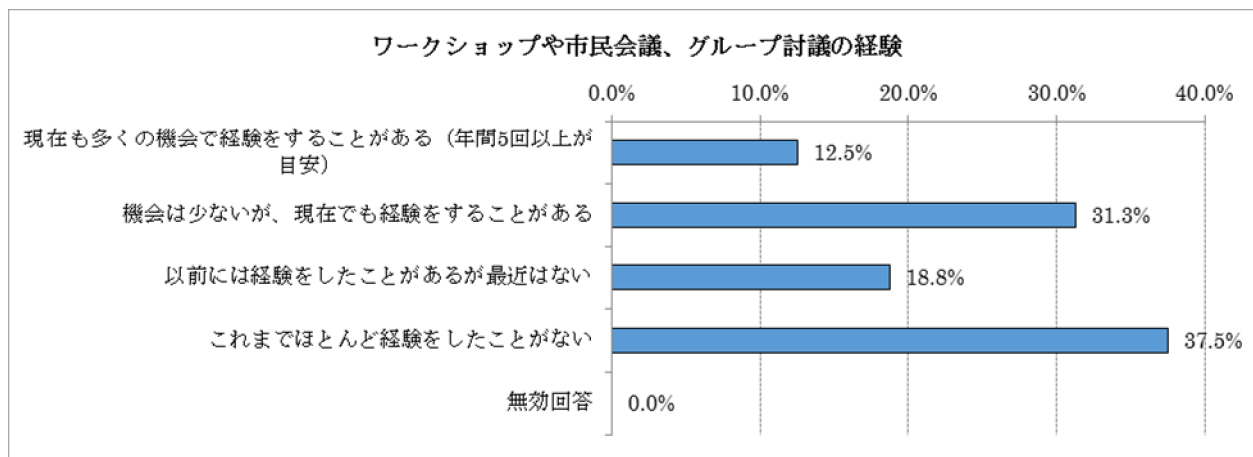


図 4-2-1 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

「これまでほとんど経験をしたことが無い」の比率は37.5%である。「熟議 2013 in 兵庫大学」では、同じ項目が42.2%、また「熟議 2014 in 兵庫大学」では46.9%であり、今回はそれよりも相当に低くなっている【図-4-2-1】。所属別での結果を【表 4-2-1】に示すが、参加者について高校生・大学生（N=53）と、それらを除いた社会人（N=27）で比較すると、社会人では「これまでほとんど経験をしたことが無い」が11.1%と低い。これに対し回答者数の多い高校生・大学生では50.9%と高く、全体での比率にも影響をしている。社会人と比べ、高校生・大学生では社会経験が少なく、会議などの機会も少ない。社会人と高校生・大学生の参加状況の差は従前の結果とも類似する。ただ高校生の場合は昨年「熟議 2014 in 兵庫大学」での77.1%から、今回は42.9%と大幅に低下している。高等学校では議論の機会を増やしていることが考えられる。また、社会人については、「機会は少ないが、現在でも経験をする」が48.1%と半数近くを占める。「現在も多くの機会に経験をする (年間5回以上が目安)」の18.5%と合算すると、2/3の社会人が、継続的にグループ討議の機会を得ていることになる。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|----------------------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 現在も多くの機会に経験をする (年間5回以上が目安) | 5 | 9.4% | 5 | 18.5% |
| 機会は少ないが、現在でも経験をする | 12 | 22.6% | 13 | 48.1% |
| 以前には経験をしたことがあるが最近はない | 9 | 17.0% | 6 | 22.2% |
| これまでほとんど経験をしたことがない | 27 | 50.9% | 3 | 11.1% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-1 所属別・ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

次に、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」ことに対し、良い点と悪い点をそれぞれ求めた【図 4-2-2、図 4-2-3】。

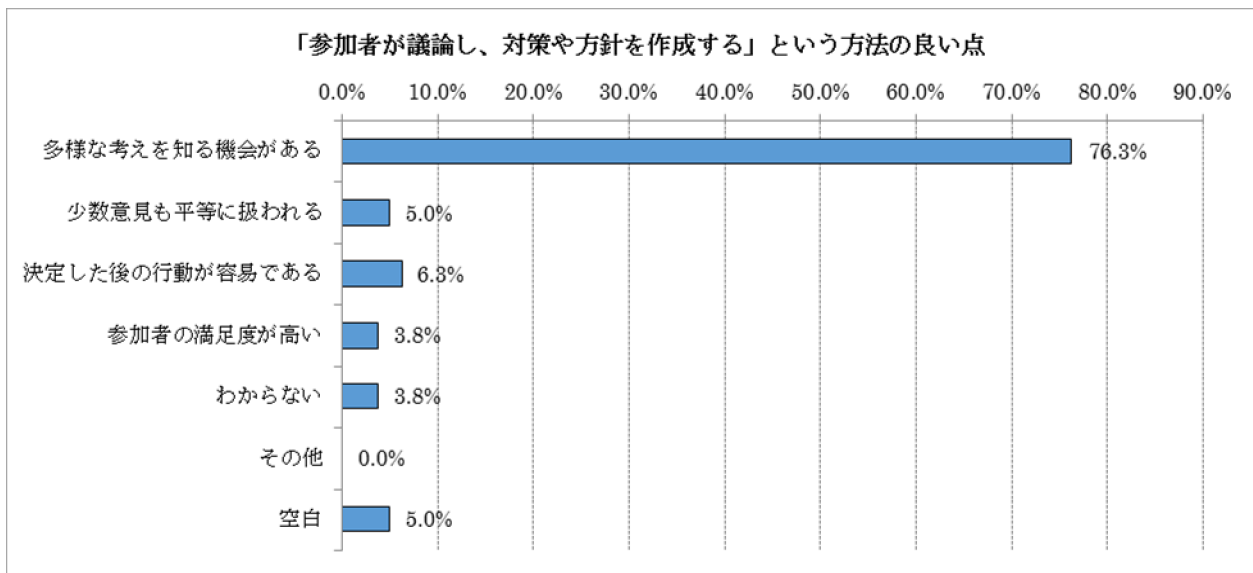


図 4-2-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

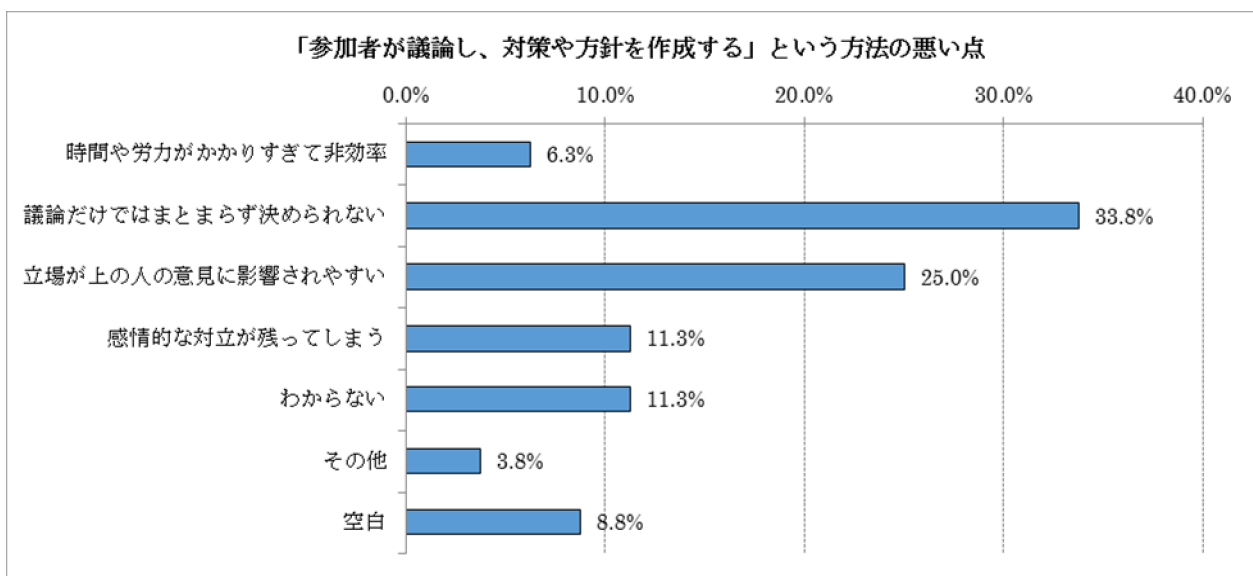


図 4-2-3 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

良い点として最も多い回答は、「多様な考えを知る機会がある」で、76.3%を占める。昨年、一昨年とも 70%を超える回答である。多様な考えを知ることへの期待が大きいことは、ワークショップの利点とされる多様な考えの表出への期待に結び付く。

逆に、悪い点では「議論だけではまとまらず決められない」が 33.8%、次いで「立場が上の人意見に影響されやすい」で 25.0%である。ちなみに、これら 2つの意見について、昨年度は、「立場が上の

人の意見に影響されやすい」が 29.2%で最大、「議論だけではまとまらず決められない」が 25.0%であったが、一昨年度は、逆に 22.9%、38.6%である。本年度の結果は、いわば一昨年度に戻った、ともいえる。いずれにしても、これらの割合が高いことは、「決定する」という要素において、議論には不利な点がある、と考えていることがわかる。なお、所属別で【表 4-2-2、表 4-2-3】に示す。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|----------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 多様な考えを知る機会がある | 38 | 71.7% | 23 | 85.2% |
| 少数意見も平等に扱われる | 4 | 7.5% | 0 | 0.0% |
| 決定した後の行動が容易である | 2 | 3.8% | 3 | 11.1% |
| 参加者の満足度が高い | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| わからない | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| その他 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 空白 | 3 | 5.7% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-2 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-------------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 時間や労力がかかりすぎて非効率 | 2 | 3.8% | 3 | 11.1% |
| 議論だけではまとまらず決められない | 14 | 26.4% | 13 | 48.1% |
| 立場が上の人の意見に影響されやすい | 12 | 22.6% | 8 | 29.6% |
| 感情的な対立が残ってしまう | 8 | 15.1% | 1 | 3.7% |
| わからない | 8 | 15.1% | 1 | 3.7% |
| その他 | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| 空白 | 6 | 11.3% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-3 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

良い点として挙げられる中で、興味深いのは、高校生・大学生では、「少数意見も平等に扱われる」が 7.5%、「参加者の満足度が高い」が 5.7%など、参加者に注目した意見にも回答が見られたこと、それに対し、社会人では「決定した後の行動が容易である」が 11.0%と決定に注目していることが伺われる。逆に悪い点として挙げられる項目に注目すると、「議論だけではまとまらず決められない」が社会人では 48.1%と半数近くを占めるのに対し、高校生・大学生では 26.4%である。また高校生・大学生は「感情的な対立が残ってしまう」が 15.1%あるのに対し、社会人の場合の比率は低い。これに対し高校生・大学生は議論そのものに関心を持ち、社会人は結論や決定に注目をしている。

(2) 議論に対する期待と得られた成果

「熟議 2015 in 兵庫大学」における議論の段階への期待と、議論の後に実際に得られた成果について、

「事前アンケート」での設問である、「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか」と「事後アンケート」にある設問「熟議 2015 in 兵庫大学」の議論の段階で、あなたにとってどのような成果がありましたか」の回答を、前者を期待と後者を成果として比較する。なお、比較を行うために、ここでは事前、事後のアンケートの双方を回答した共通回答者（N=73）を対象としている【図 4-2-4】。

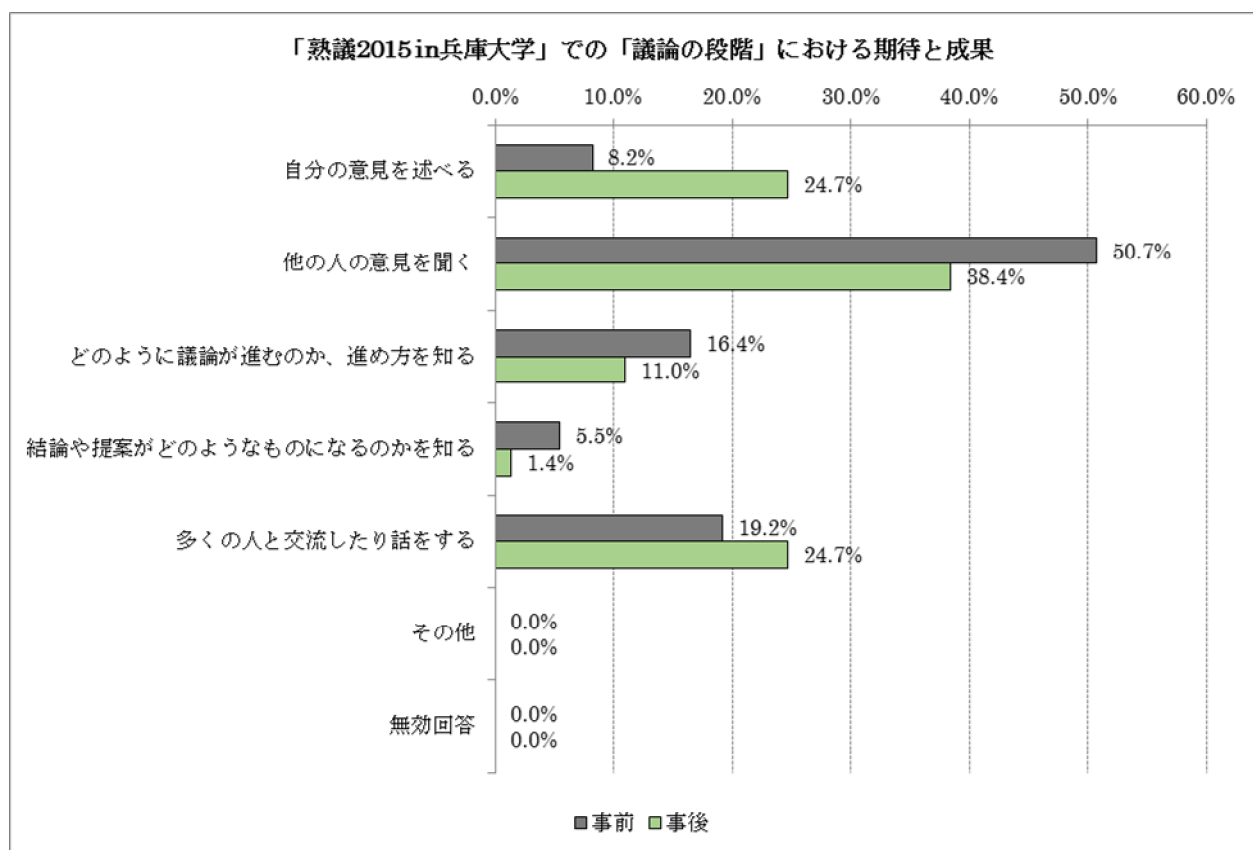


図 4-2-4 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

期待での回答の多い項目は、「他の人の意見を聞く」で 50.7%である。意見を聞くことへの期待は、「熟議 2013 in 兵庫大学」で 44.9%、「熟議 2014 in 兵庫大学」では 46.6%といずれも半数を占めている。熟議への期待は他者の意見を聞く機会と認識されており、裏返すならばそうした機会を求める人が多いことになる。「多くの人と交流したり話をする」が 19.2%、「どのように議論が進むのか、進め方を知る」が 16.4%である。両選択肢とも、過去の熟議におけるアンケート結果にあっても、15%から 20%程度を占めており、同様の結果を示していた。興味深いのは「自分の意見を述べる」の期待が 8.2%を占めている点である。「熟議 2013 in 兵庫大学」では 1.3%と低く、「熟議 2014 in 兵庫大学」は 3.4%であった。「自分の意見を述べる」期待が徐々に増加をしている。意見の述べる機会との認識が広がってきているのではないかと推察される。

次に、成果では、「他の人の意見を聞く」が 38.4%であり、期待と比べその比率が低下する。昨年度「熟議 2014 in 兵庫大学」の結果は、むしろ 47.7%と増加していた。もっとも、一昨年度の「熟議 2013 in 兵庫大学」の場合は、本年度同様に成果の方が期待よりも低下 (39.7%) していたことを踏まえると、常に「他の人の意見を聞く」ことの重要性を半数の人は、期待、成果ともに有しているといえる。「自分の意見を述べる」は 24.7%であり、期待の 8.2%と比べて増加している。この点は、昨年度、一昨年度の結果とも共通する。昨年度は期待の 3.4%から成果では 22.7%、一昨年度は 1.3%から 17.9%へ、それぞれ大幅に増加した。熟議の中で、自分の意見を述べる機会を發揮し、重要性を認識したといえる。「多くの人と交流したり話をする」は 24.7%に増加、「どのように議論が進むのか、進め方を知る」は逆に 11.0%に低下している。昨年度、「多くの人と交流したり話をする」については、成果 (10.2%) が期待 (15.9%) を下回り、一昨年度、15.4%から 29.5%と倍増していたことと対照的であった。年度よっての違いは、議論の進め方にも影響を受けた可能性がある。

期待と成果について、所属先から高校生・大学生 (N=47)、及び社会人 (N=26) についてと 2 つに区分し、比較を行う【図 4-2-5、図 4-2-6】。

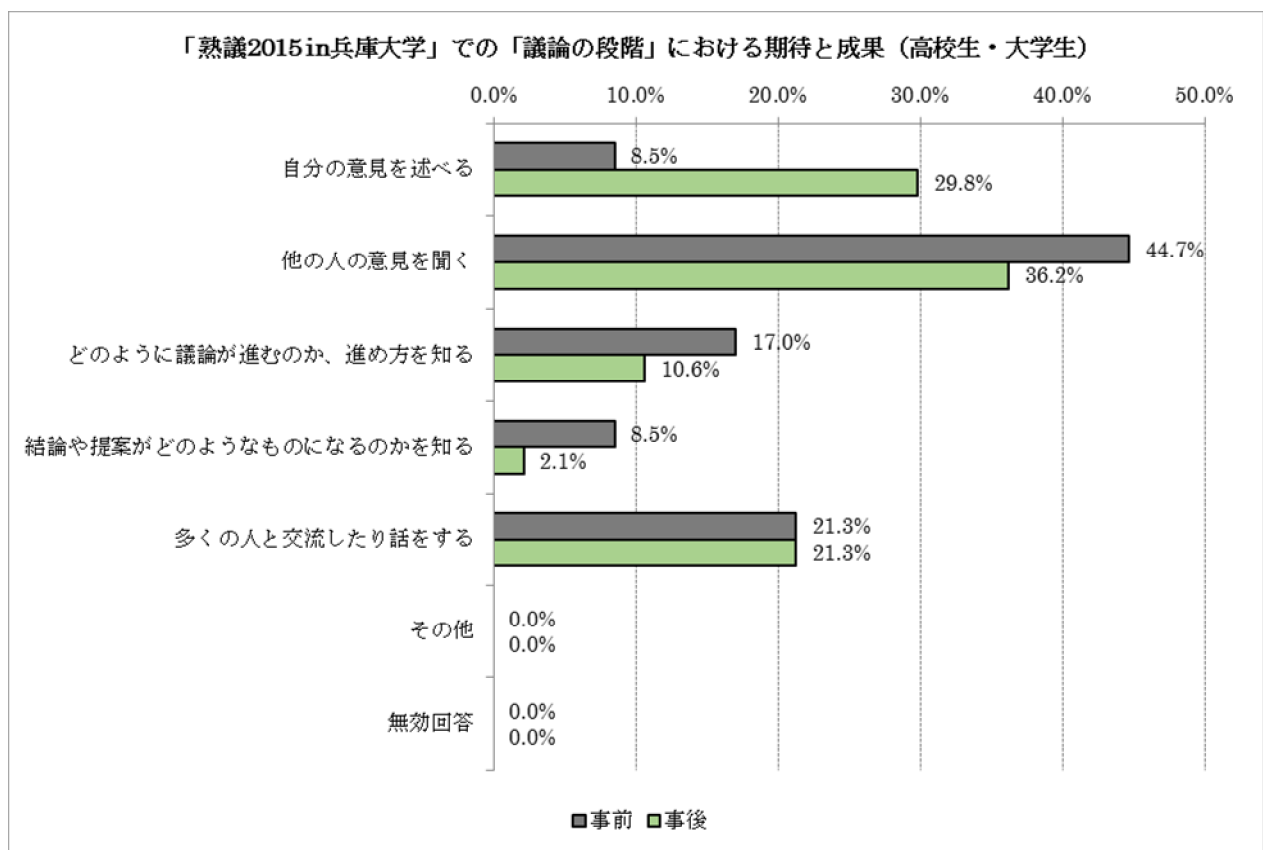


図 4-2-5 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果 (高校生・大学生)

高校生・大学生は、「他の人の意見を聞く」との期待は 44.7%であり、社会人の 61.5%と比べて低くなっている。「多くの人と交流したり話をする」の期待は高校生・大学生で 21.3%であり、社会人の 15.4%

を上回る。しかし、成果では21.3%、30.8%と逆転される。前述のように、議論の過程にも関心を持つ高校生・大学生にとっては、交流は大事な要素であり、期待も高く、結果も準じたのではないかと。社会人は結論を得る、ということに議論の意義の中心をおいており、議論の最中にある交流には関心が低かった。しかし、多様な世代との交流を体験し、それを重要な成果と判断した。多様な世代との交流を一つの重要なテーマとする兵庫大学熟議手法にとっては、その手法を評価されたと考えてよいだろう。

また、「自分の意見を述べる」については、高校生・大学生では、期待の8.5%から成果の29.8%に、社会人では7.7%から15.4%にいずれも増加している。特に、高校生・大学生の場合の伸び率が大きく、社会人を対象として自分の意見を述べる事ができた自信も背景にあると考えられる。

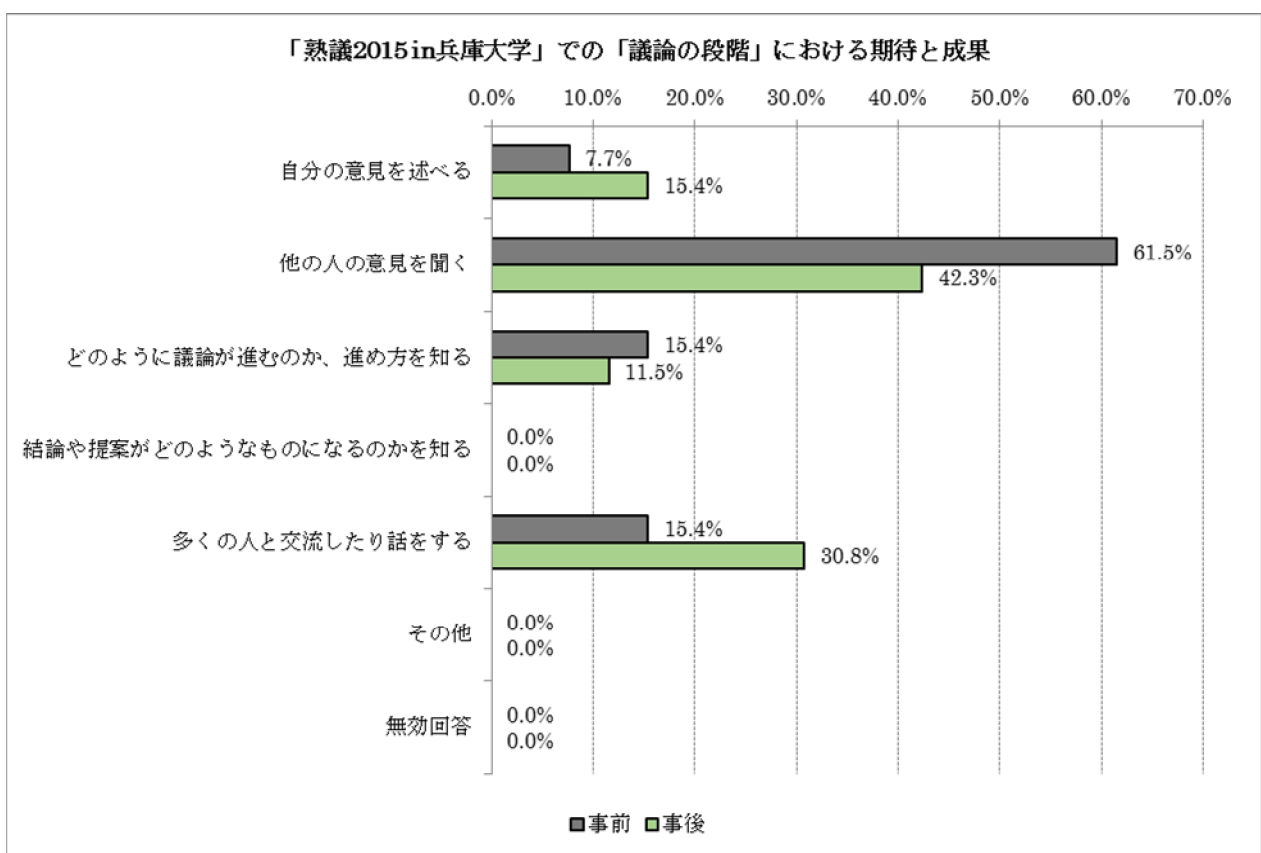


図4-2-6 「熟議 2015 in兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果 (社会人)

(3) 議論に臨む重要な資質とは

兵庫大学熟議手法は、教育的な側面を有することは既に述べたとおりである。その中でも未成年など、まだ社会に出る前の若年者、すなわち熟議に参加する高校生、大学生については、コミュニケーション力など社会人に必要な能力の涵養が教育の中心となる。大学生に対しては「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、また高校生に対しては「熟議 2013 in 兵庫大学」以降、社会人基礎力²などを踏まえて、熟議に関

² 経済産業省が2006年から提唱する職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力であり、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されている。

連するであろう10の能力について、熟議の前後で自己評価を行い、その変化から熟議による成長を計測した。なお、これらの詳細について、第5章では高校生、第6章では大学生について、熟議に臨む態度、その結果としての意見の変容とともに、分析、評価している。

社会人に対し、これら成長を問うことは適切ではなく、これらの能力が社会経験を踏まえ、議論に臨む際に重要であるかどうかを計測することとした。具体的には、「事前アンケート」と「事後アンケート」にて、10の能力について、その重要度を、5が非常に重要、1が全く重要ではないという5段階評価で評価してもらい、その平均値を共通の回答者（N=26）について比較をする【図4-2-7】。

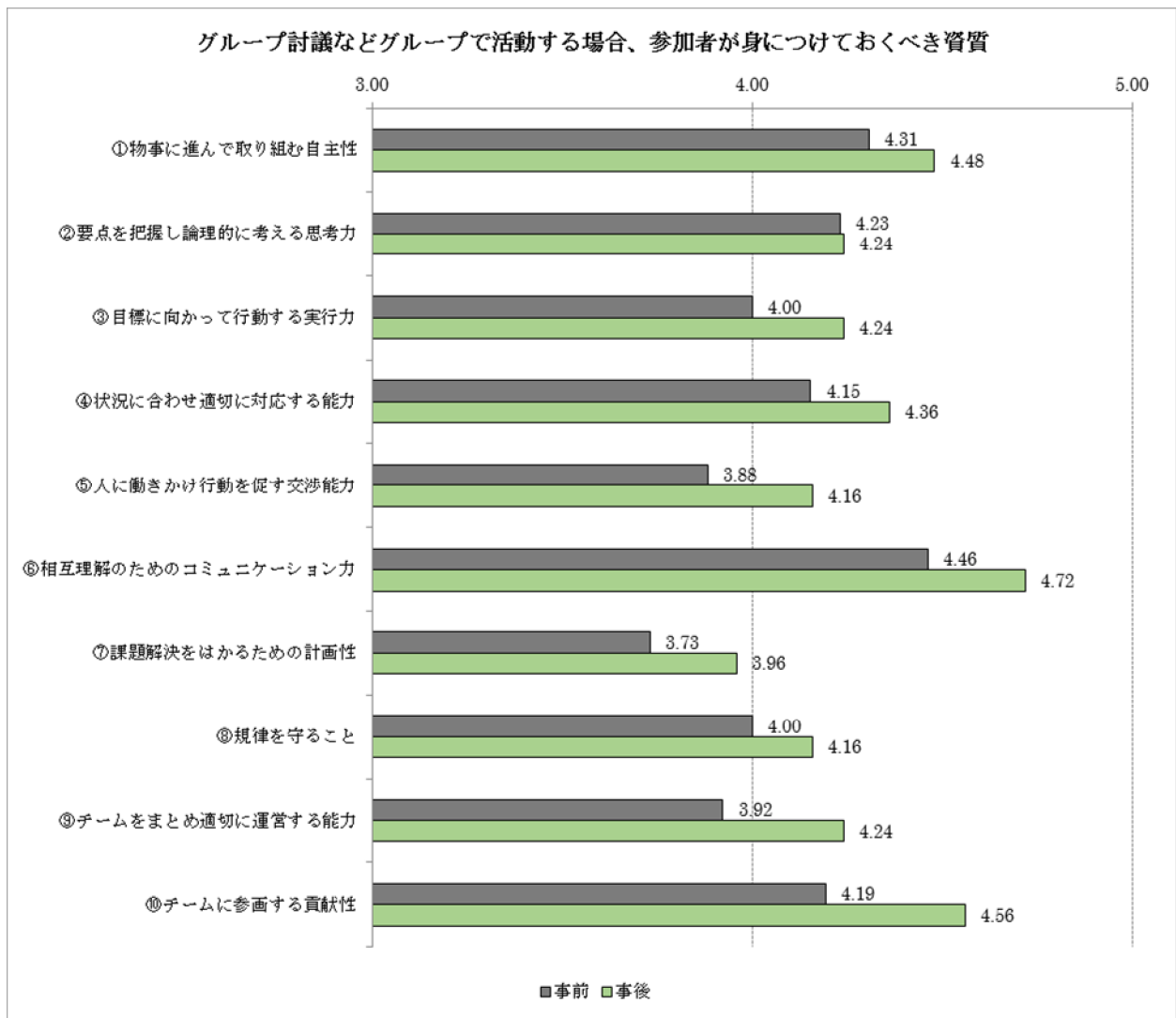


図4-2-7 グループ討議などグループで活動する場合、参加者が身につけておくべき資質

全ての能力において、事後の平均が事前を上回っており、つまり、熟議を終えてそれら能力の重要性が上がったことから、いずれの能力も熟議を行うことに不可欠ということになる。「熟議2013 in 兵庫

大学「熟議 2014 in 兵庫大学」でも同様の結果が得られており、これらの能力を高校生・大学生が身につけることで、成長をしたかどうかを判断する、との検証には大きな意味があるといえる。

「事前アンケート」で点数が最も高いのは、「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.46 ポイント、次いで、「①物事に進んで取り組む自主性」が 4.31 ポイント、「②要点を把握し論理的に考える思考力」が 4.23 ポイントとなっている。昨年度においても、コミュニケーション力が 4.49 ポイント、自主性が 4.41 ポイント、思考力が 4.33 ポイントと同様な順序であり、さらに一昨年度の「熟議 2013 in 兵庫大学」でも、これら 3 つの能力が「事前アンケート」で高くなっていた。熟議など議論には、コミュニケーション力とともに、課題を考える思考力や積極的に参加する自主性が求められる。

「事後アンケート」でも、やはり「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.72 ポイントと最も高い。事後の回答者 (N=35) を見ると、非常に重要という 5 を挙げた回答者が 45.7% と 4 割以上を占める。次いで「⑩チームに参画する貢献性」が 4.56 ポイント、「①物事に進んで取り組む自主性」が 4.48 ポイント、「④状況に合わせて適切に対応する能力」が 4.36 ポイントとなっている。コミュニケーション力、自主性は、しばしば就職の際にも求められるが、回答はそうした社会人としての認識を示し、社会人として要する能力と考えられている可能性がある。注目したいのは「⑩チームに参画する貢献性」で事後では事前と比して 0.37 ポイント上昇をしている。チームについては「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」も 0.32 ポイント、上昇している。このように、実際に議論を行った後、チームワークへの関心が強くなっている。昨年度も「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」は事前の 4.0 から事後に 4.28 へと上昇している。今年度の熟議では、終日を議論の段階に充てるなどこれまで以上に同一テーブルで過ごす時間を長く取っていた。その中で、培われたチームワークが熟議を進める上で役に立った、との認識があったと思われる。

3. 「熟議 2015 in 兵庫大学」と熟議民主主義

(1) 認知度と参加

兵庫大学での「熟議」は、議論の機会だけではなく、事前の熟慮やその後の交流なども含む一連の手法である。この手法を本学で開発し、アンケート結果や参加者の声を参考にしつつ、毎年改善を続けている。改善は、もちろんより良い手法を求めて行われているのであるが、同時に参加者が様々な課題について、議論をすることでその解決に導く、との手法を定着させる、という思いもある。熟議の意義は、熟議型民主主義、討議型民主主義といわれるように、民主主義の保証という側面があり、兵庫大学熟議手法が民主主義を支える一助になると考えている。そのため、熟議という言葉の認知度が高まり、身近なものとなることが不可欠である。こうした点を踏まえ、この節では熟議の意義を考えることとする。

最初に、参加者の熟議に対する認知度を明らかにする。「事前アンケート」(N=80)、つまり熟慮の前の段階での調査である。

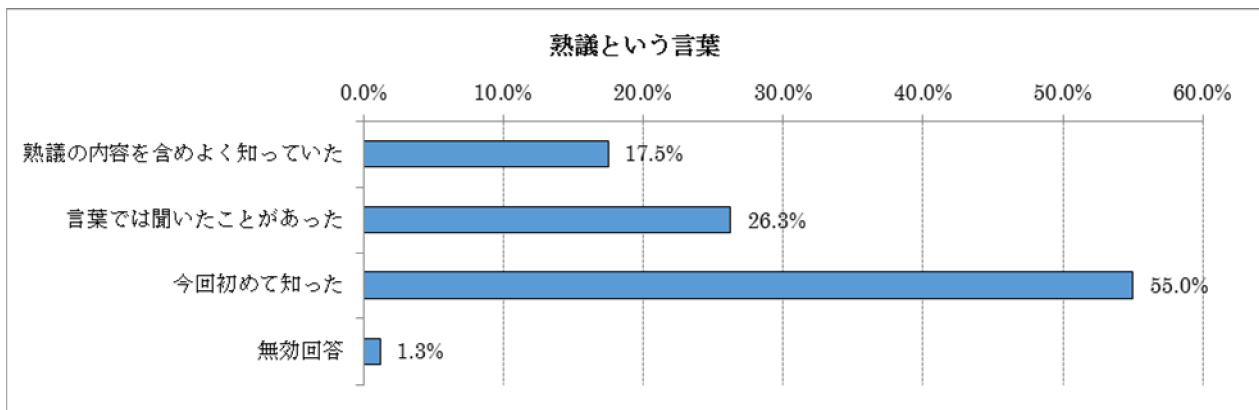


図 4-3-1 熟議という言葉の理解

4

「熟議の内容を含めよく知っていた」との回答は 17.5%、「言葉では聞いたことがあった」は 26.3%、「今回初めて知った」は 55.0%である。「今回初めて知った」との回答が、過半数を占めており、まだ一般的な名詞とはなっていないと考えられる【図 4-3-1】。

これを所属別で見ると【表 4-3-1】、高校生・大学生では、「熟議の内容を含めよく知っていた」が 5.7%、社会人では 40.7%と、両者に大きな差がある。社会人の場合、兵庫大学の熟議に継続して参加される方があることも要因と思われる。高校生・大学生では、「今回初めて知った」が 71.7%と 7 割を上回る。もっとも高校生・大学生も、「言葉では聞いたことがあった」との回答が 22.6%を占めている。昨年度、この比率は 20.4%で、5 人に 1 人程度は熟議を知っていることになる。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-----------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 熟議の内容を含めよく知っていた | 3 | 5.7% | 11 | 40.7% |
| 言葉では聞いたことがあった | 12 | 22.6% | 9 | 33.3% |
| 今回初めて知った | 38 | 71.7% | 6 | 22.2% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-3-1 所属別・熟議という言葉の理解

熟議の認知度はどのように変化をしたのであろうか。当該質問項目については、2012 年度に実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、毎年調査をしている。【図 4-3-2】は、毎年の調査結果から、熟議についての理解の変化を示したものである。「熟議の内容を含めよく知っていた」は、2012 年度には 3.1%であったが、2015 年度では 17.5%にまで上昇、逆に、「今回初めて知った」との回答は 70.1%から 55.0%にまで減少をしている。明らかに熟議の認知度が高まっていることが読み取れる。熟議の普及という一つの目的は、徐々にではあるが、達成されつつある、といえるであろう。

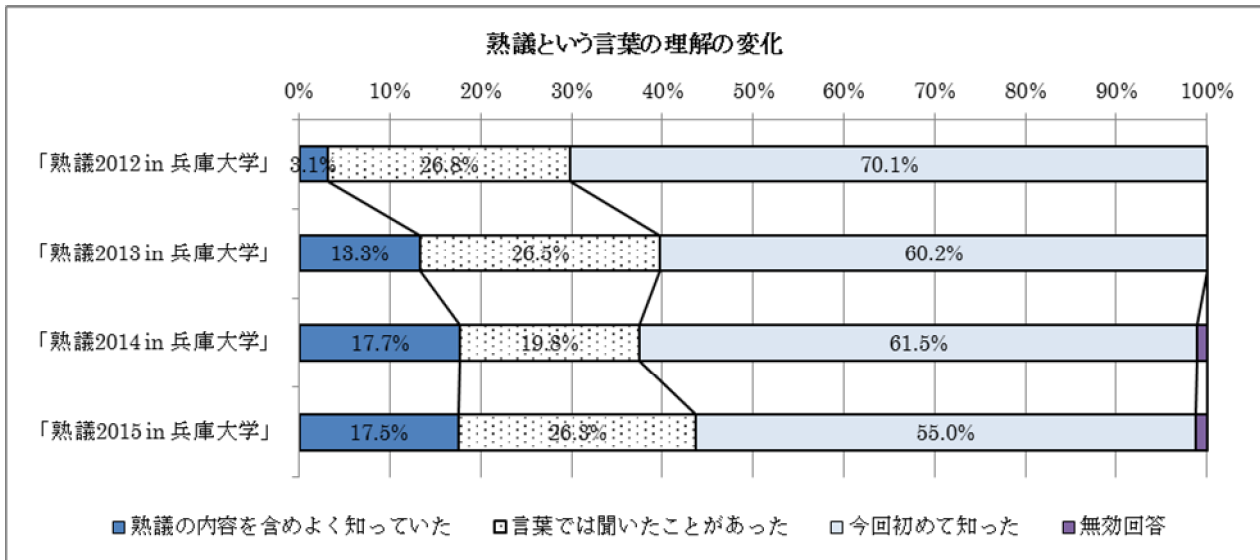


図 4-3-2 熟議という言葉の理解の変化

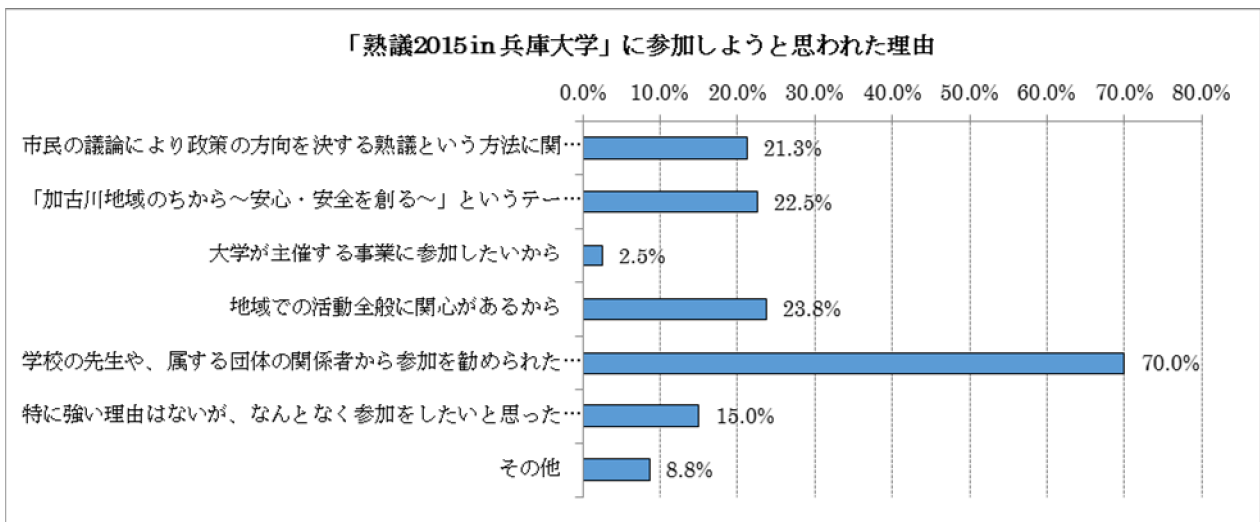


図 4-3-3 「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由

次に、「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由を複数回答で示す。

70.0%が「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」で占められている。これは昨年度とほぼ同一である。以下、「加古川地域のちから～安心・安全を創る」というテーマに関心があるから」が 22.5%、「地域での活動全般に関心があるから」が 23.8%、「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 21.3%と熟議への関心に応じて参加したとの回答がそれぞれ 2 割を占めている【図 4-3-3】。

所属別で、高校生・大学生は「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が 84.9%となっている【表 4-3-2】。また「地域での活動全般に関心があるから」「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 13.2%を占めており、熟議の持つ手法への関心も見られ、

参加についてはテーマよりも、機会のあることが重要であった。つまり、機会を増やすことで熟議への若年者の理解と参加を拡大することが可能である。興味深い点として、「特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから」が20.8%、また「その他」が13.2%を占めていることがある。「その他」についての記述では、「自分のためにも議論する力をのばしたい」など自分の力を付けたい、という回答が多くみられた。これらの点も熟議という方法への関心とみなすことができる。今後、市民の地域への関わりを重視するシティズンシップ教育の一環としての熟議の役割が高まることが予想される。

(各項目における回答者に対する割合)

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-------------------------------------|---------|-------|-----|-------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから | 7 | 13.2% | 10 | 37.0% |
| 「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」というテーマに関心があるから | 3 | 5.7% | 15 | 55.6% |
| 大学が主催する事業に参加したいから | 1 | 1.9% | 1 | 3.7% |
| 地域での活動全般に関心があるから | 7 | 13.2% | 12 | 44.4% |
| 学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから | 45 | 84.9% | 11 | 40.7% |
| 特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから | 11 | 20.8% | 1 | 3.7% |
| その他 | 7 | 13.2% | 0 | 0.0% |
| 計 | 81 | | 50 | |

表 4-3-2 所属別・「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由 (M.A)

社会人では、「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」というテーマに関心があるから」が55.6%が過半数の方が、テーマに惹かれての参加である。次いで、「地域での活動全般に関心があるから」が44.4%であり、いずれにしても地域の課題を自ら解決することに関心があると思われる。さらに「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が40.7%を占めている。

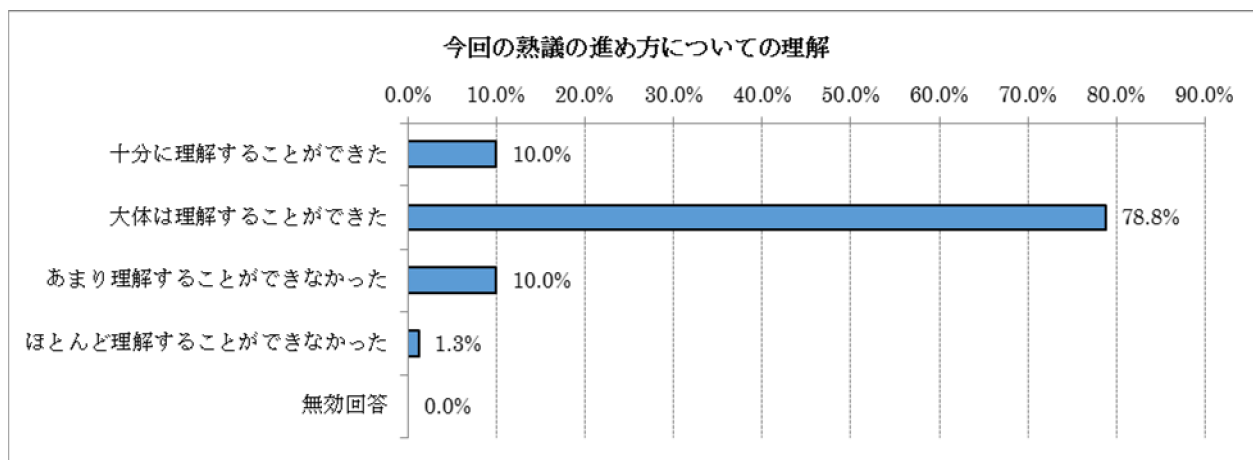


図 4-3-4 今回の熟議の進め方についての理解

熟議の進め方への理解を、「事前アンケート」の結果から明らかにする。

「十分に理解することができた」は 10.0%で、また「大体は理解することができた」は 78.8%である。合計では 88.8%が手法を理解したことになる。昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」では、それぞれ 7.3%、77.1%であり、昨年度を上回るが、一昨年度の 14.5%、73.5%と比べた場合、「十分に理解することができた」がやや低くなっている。とはいえ、全体の傾向として、熟議に対する理解度については年度による差はほとんどないといってもよいだろう【図 4-3-4】。

(2) 熟議への評価と比較

次に、「事後アンケート」の結果から、「熟議 2015 in 兵庫大学」への評価を確認する。

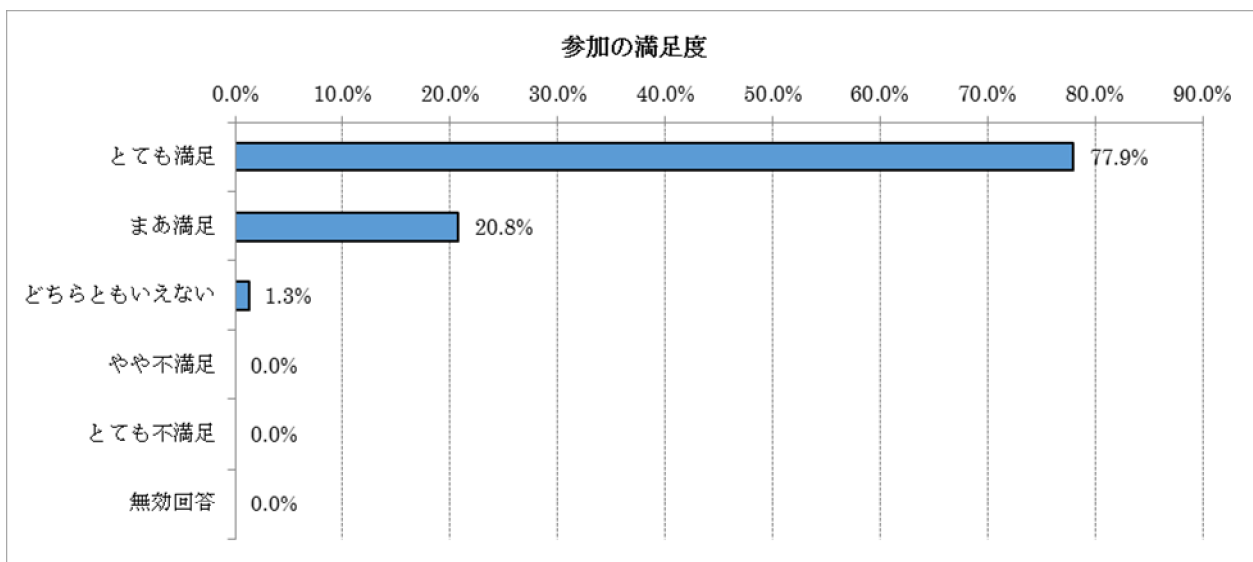


図 4-3-5 参加の満足度

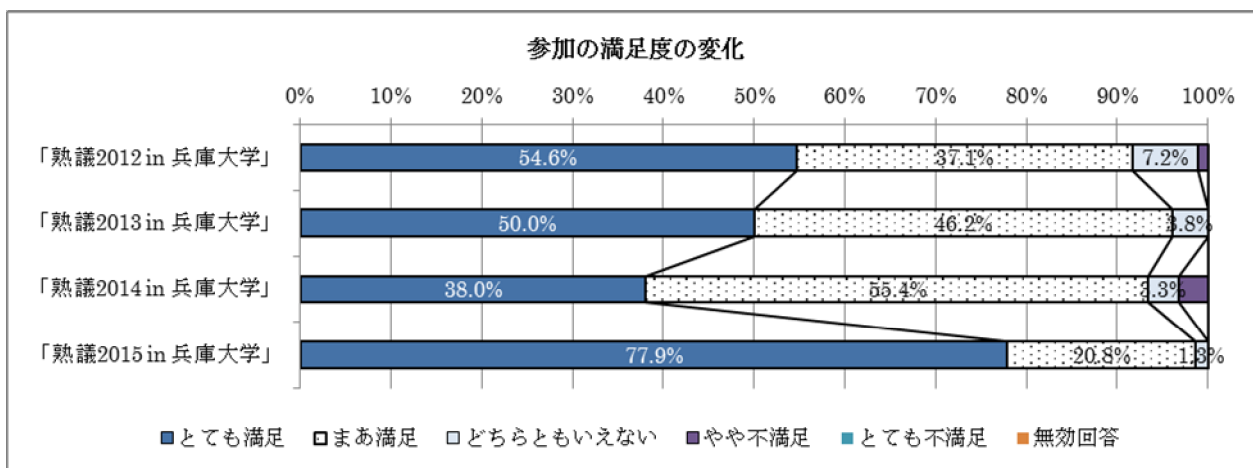


図 4-3-6 参加の満足度の変化

参加への満足度では、「とても満足」が 77.9%、「まあ満足」 20.8%を占めており、ほとんどの方が満足をしている。第 1 章でも述べたように、満足度向上にも取り組み、その成果があったといえる【図 4-3-5】。

そして、参加の満足度の変化については、「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、「とても満足」の回答が低下する傾向にあったが、「熟議 2015 in 兵庫大学」で挽回し、高い満足度となった【図 4-3-6】。

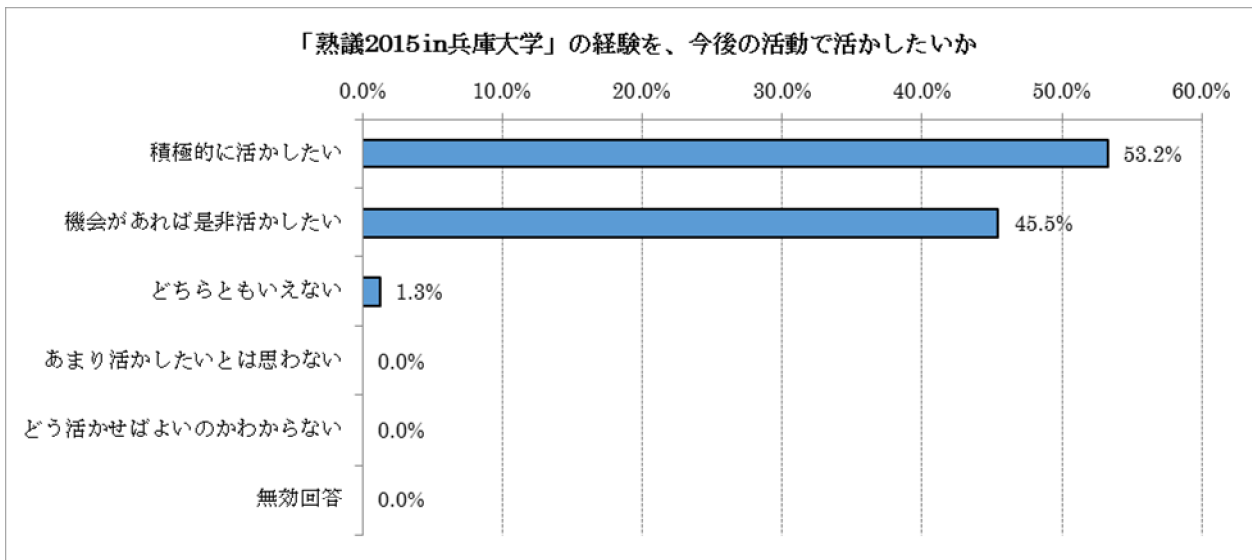


図 4-3-7 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を今後に活かしたいか、との設問に対し「積極的に活かしたい」、53.2%、「機会があれば是非活かしたい」45.5%とほとんどの回答者が、活かすことに賛成である【図 4-3-7】。

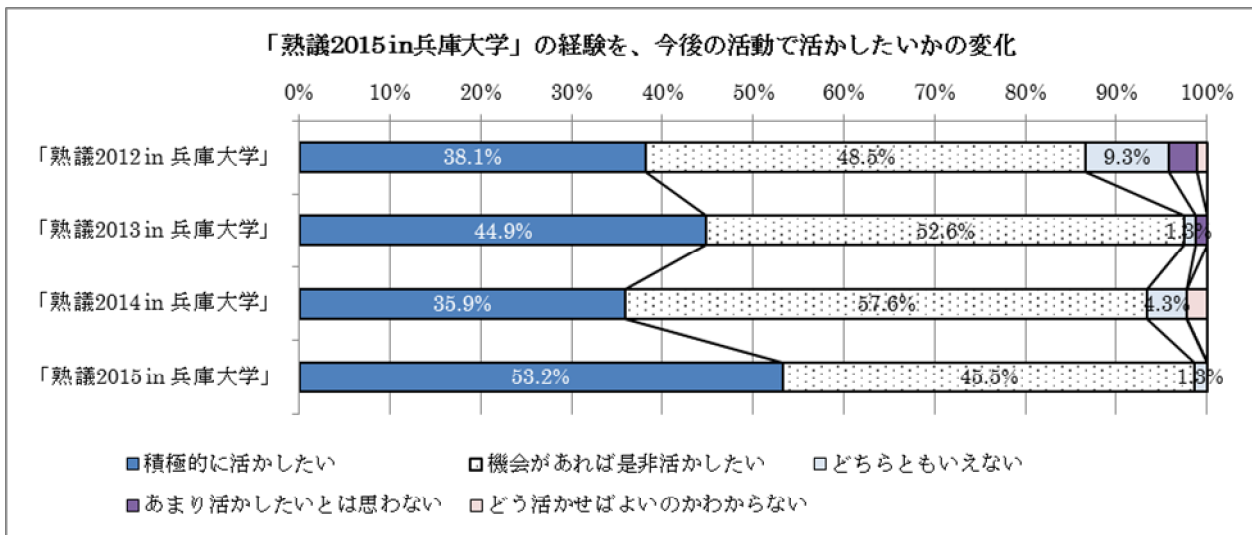


図 4-3-8 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいかの変化

「熟議 2012 in 兵庫大学」からの変化を見ると、「積極的に活かしたい」との比率は増加する傾向にあるといえる。「どちらともいえない」「あまり活かしたいとは思わない」は、年度を追うと少なくなる。ただし、昨年の「熟議 2014 in 兵庫大学」において、「積極的に活かしたい」の比率は低下しており、

これは満足度の低下と関係がある。つまり、熟議を実施してその満足度が高いことによって、積極的に活かしたい、との希望が拡大すると考えられる【図 4-3-8】。

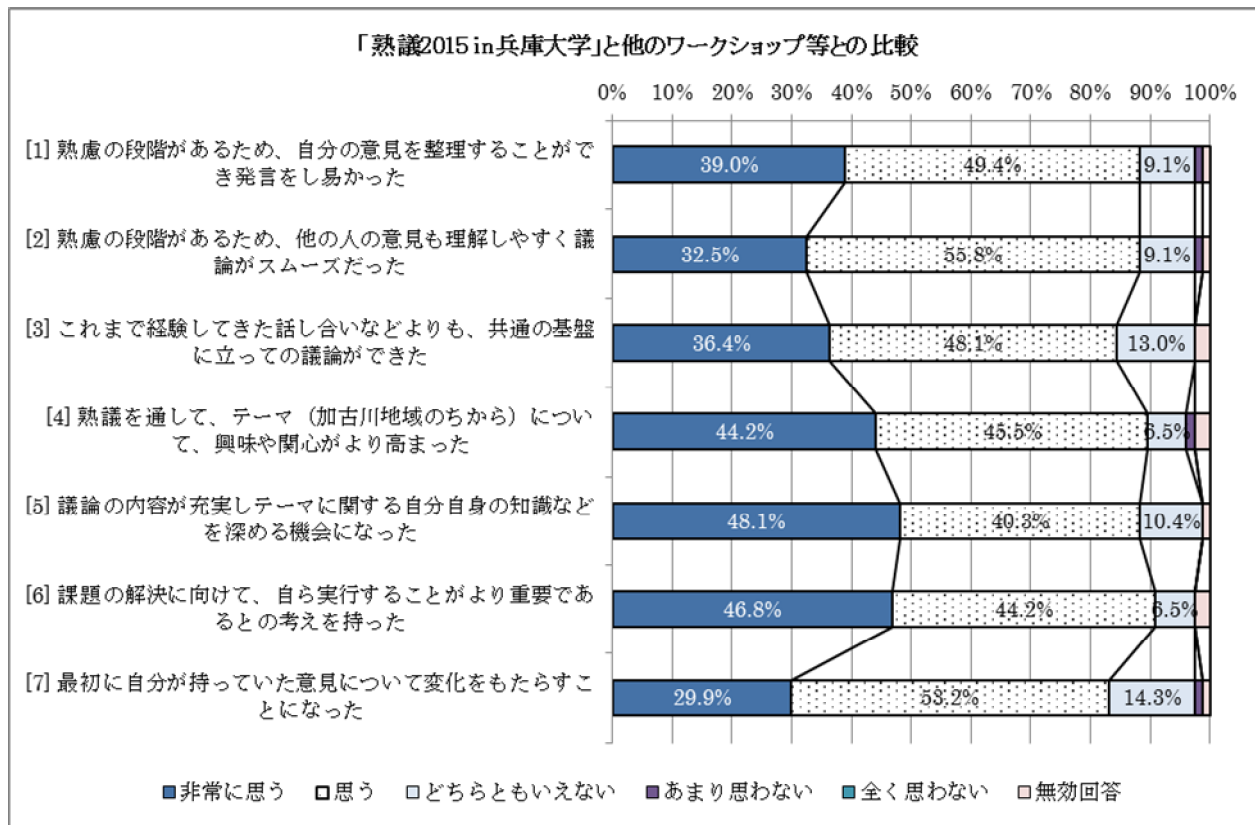


図 4-3-9 「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較

「熟議 2015 in 兵庫大学」の他の議論などと比較しての利点を示す【図 4-3-9】。「非常に思う」が多く、賛同の回答が多いものは、「議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」である。この項目について、昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「非常に思う」が 26.1%と低かったものの、「思う」が 62.0%と合計で 88.0%となり、最も賛同が多かった。ワークショップ形式での議論の充実が評価されている。「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」との項目も同じく、議論を通してテーマを考えることであるが、「非常に思う」が 44.2%、「思う」が 45.5%と高い数値となっている。また、「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」については、「非常に思う」が 46.8%、「思う」が 44.2%であった。昨年度も当該項目に対してはやはり賛同が多く、議論から実行を含む手法であることへの評価が高い。

兵庫大学の熟議手法の特徴とも言える熟慮の段階を設けていることについては、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をしやすかった」は、「非常に思う」が 39.0%、「思う」が 49.4%、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は 32.5%、55.8%となっており、熟慮の期間において、段階的に考え、意見を述べる機会を設けたこともあり、議論の機

会に話をすることに、より役立ったと考えられる。とはいえ、「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」については、「どちらともいえない」が13.0%であり、熟慮により共通の基盤を形成することは、やや困難であった。なお、議論により「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」は、「非常に思う」が29.9%と最も低いなど、議論がその後の行動に影響をする、とは必ずしも言えない。

「非常に思う」を2、「思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまり思わない」を-1、「全く思わない」を-2として、有効回答数で除した平均ポイントを計算する。

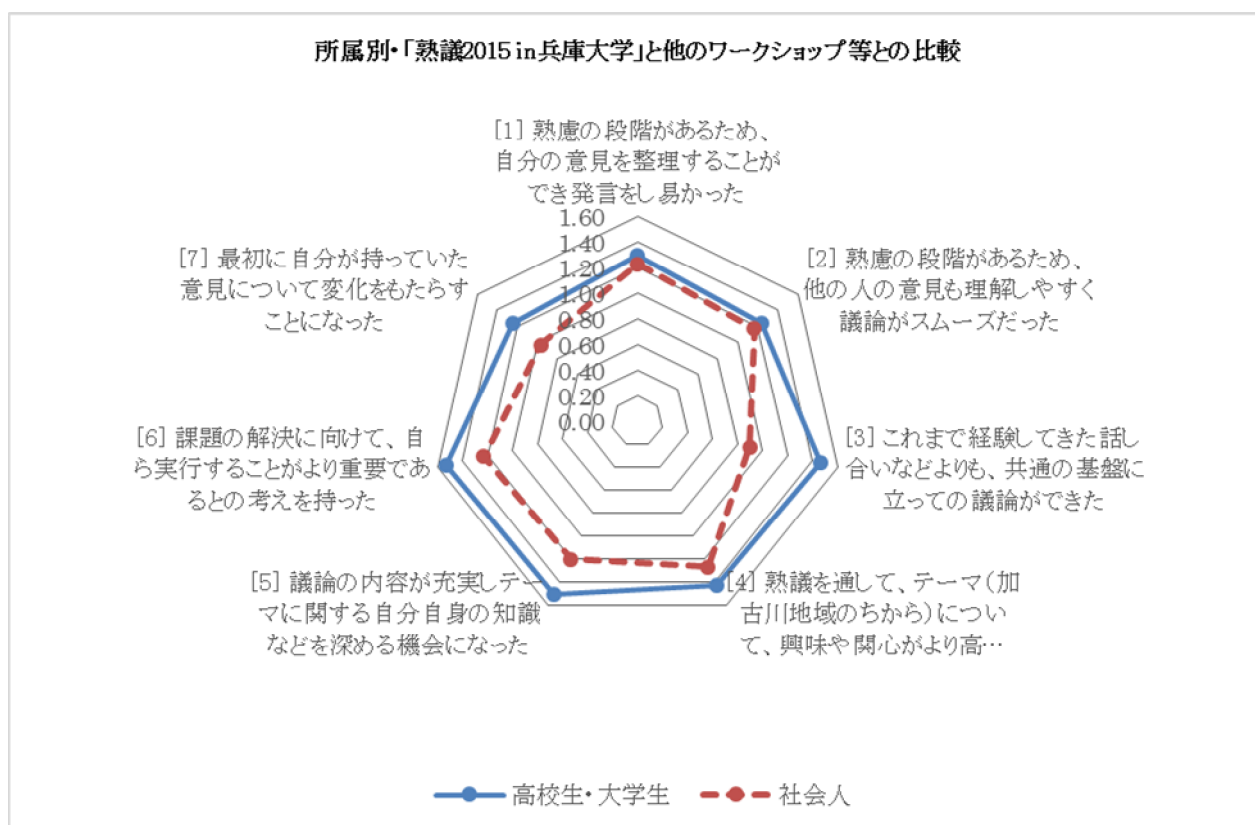


図 4-3-10 所属別・「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較 (ポイント)

高校生・大学生と社会人との所属別で比較をすると、高校生・大学生の方がいずれの項目でもポイントが高い【図 4-3-10】。特に、「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」は高校生・大学生が1.47であるのに対し、社会人では0.90である。多様な世代との議論を対等な立場で行うことができた、という点で高校生・大学生で賛同をする評価が高かったと思われる。逆に両者のポイントの差が小さかったのは、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」及び「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」で、前者は高校生・大学生が1.30と社会人が1.23、後者は1.24、1.17で、差は0.7ポイントである。

いずれも熟慮の段階に関する項目であり、熟慮への工夫が世代を問わず、広い範囲で高い評価を得る要因になったと思われる。

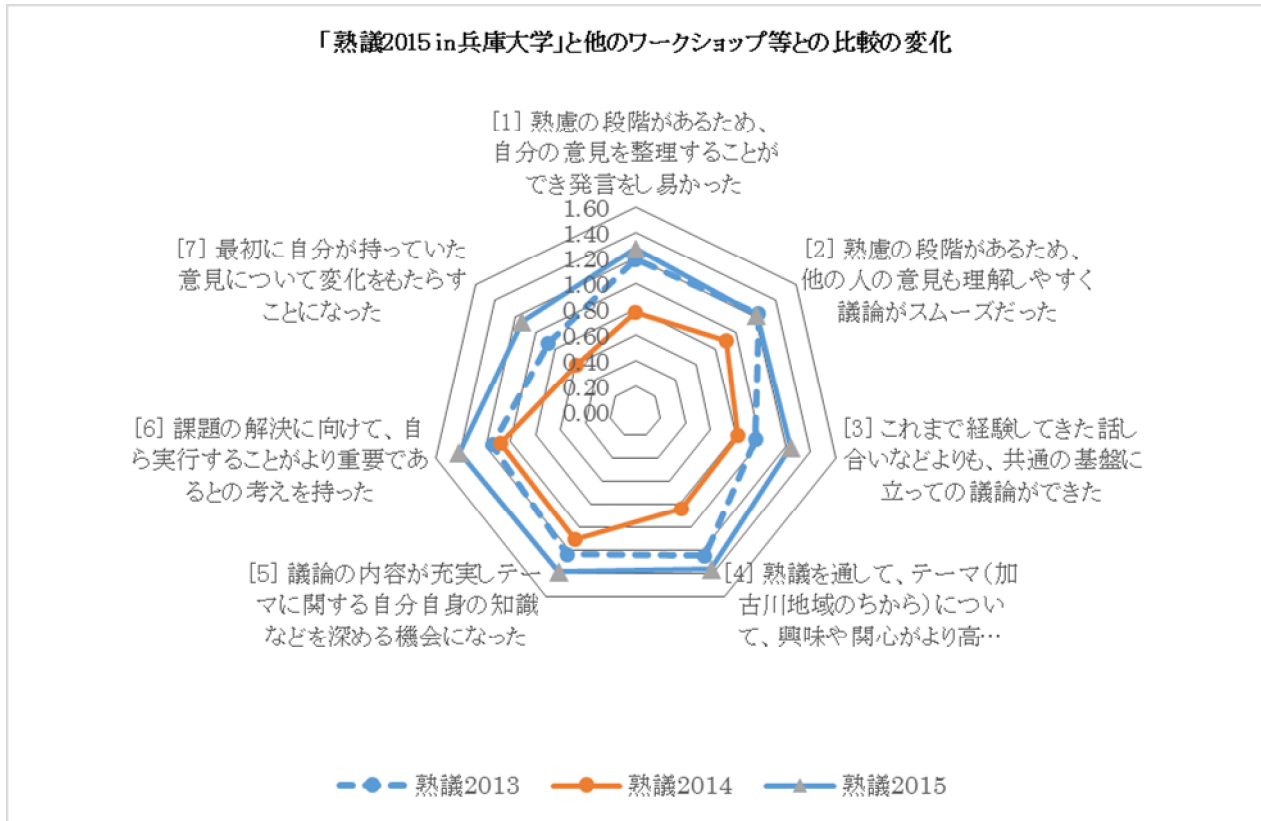


図 4-3-11 「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較の変化 (ポイント)

平均ポイントの年度別の違いについてみると【図 4-3-11】、ほぼ全ての項目について「熟議 2015 in 兵庫大学」での値は、「熟議 2013 in 兵庫大学」のそれを上回る。そして「熟議 2014 in 兵庫大学」については、「熟議 2013 in 兵庫大学」における値よりも小さくなっている。つまり、平均ポイントの値は、2015 年>2013 年>2014 年となっている。これは各年度での熟議に対する満足度と関係があり、満足度が十分に高くなければ、手法としての利点は低く評価されざるを得ない。

「熟議 2013 in 兵庫大学」と「熟議 2015 in 兵庫大学」のそれぞれの項目での値を比較した場合、熟慮に関連する「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」は、2013 年で 1.19、また 2015 年で 1.28 であり、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は 1.23、1.21 と、どちらも比較的似た数値となっている。

(3) 熟議は現実に役立つか

熟議を進める背景に熟議民主主義の定着のあることは前述した。特に、政策の決定過程において市民が平等な立場で議論をすることで、行政や政策にどのような影響を与えるのか、あるいはその可能性が

あるのかを明らかにする必要がある。行政への影響、という点が重要である。行政は、立法府での審議を経て成立した予算や条例、法に従い事務を行うことが原則であるが、行政の現場では具体的に市民の声を必要とする場合もある。立法とは異なる立場で行われる熟議は、実際に行政に影響を与えうるのか。それは行政府の長たる首長や内閣総理大臣にもよるであろう。特に、地方自治体では議院内閣制の国と異なり、首長が直接選挙で選ばれることもあり、場合によっては選挙の当選により公約を市民の声とすることも可能である³。実際には、法に定められている、あるいは首長による諮問に応じる審議会、委員会など専門家や関係者による意見聴取の場もある。ただ、熟議のようにあらゆる市民に平等に議論をおこなう機会が設けられ、その結論を市民の意向として行政に反映することができるのか。「事後アンケート」では、熟議の経験を踏まえ、「市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか」の質問を行っている【図 4-3-12】。

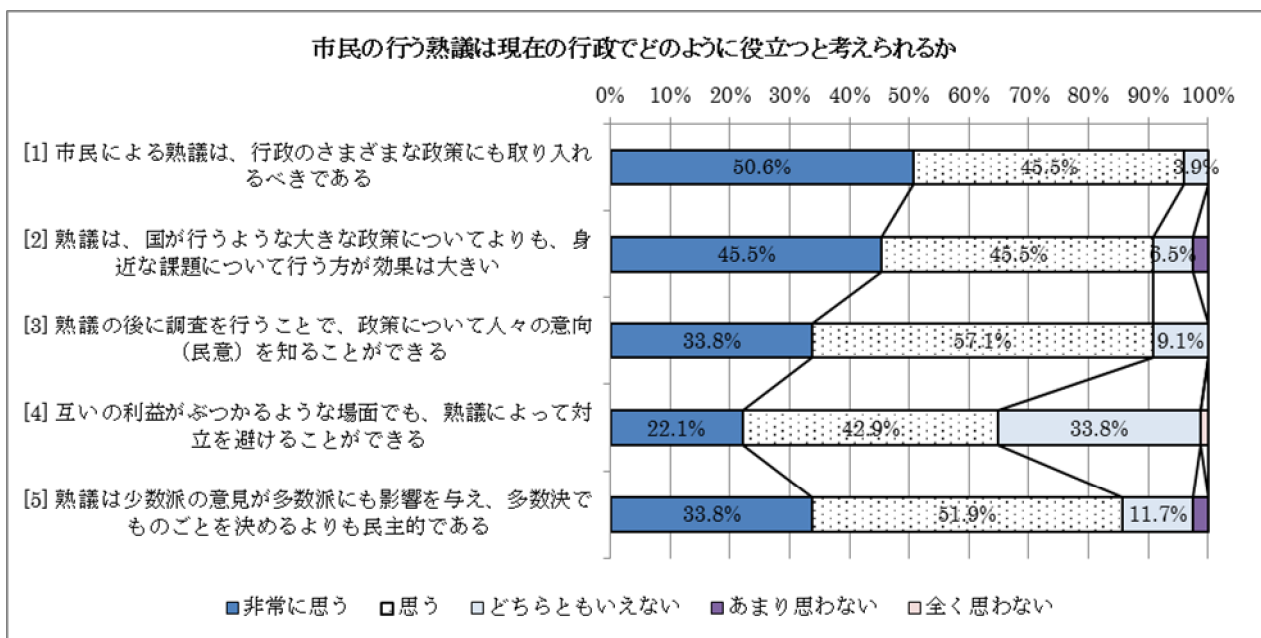


図 4-3-12 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

「非常に思う」「思う」の合計が最も多くを占める内容が、「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」であり、96.1%である。特に、「非常に思う」の回答が50.6%と過半数である。昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」においても、この項目への賛意が最も強く「非常に思う」「思う」の合計82.6%であった。一昨年度もやはり85.9%を占めていた。熟議を行政に取り入れ、現実の政策決定にも活かすことができることへの期待が大きいのである。次いで、「熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」は、「非常に思う」「思う」がそれぞれ45.5%で、91%が賛同している。身近な課題の議論の経験を踏まえ、熟議がより身近な範囲で可能であることを示している。この結果を所属別で示す【図 4-3-13】。

³ 実際には、当選後、公約通りに進めることで、議会との対立など混乱をもたらした自治体の事例もある。

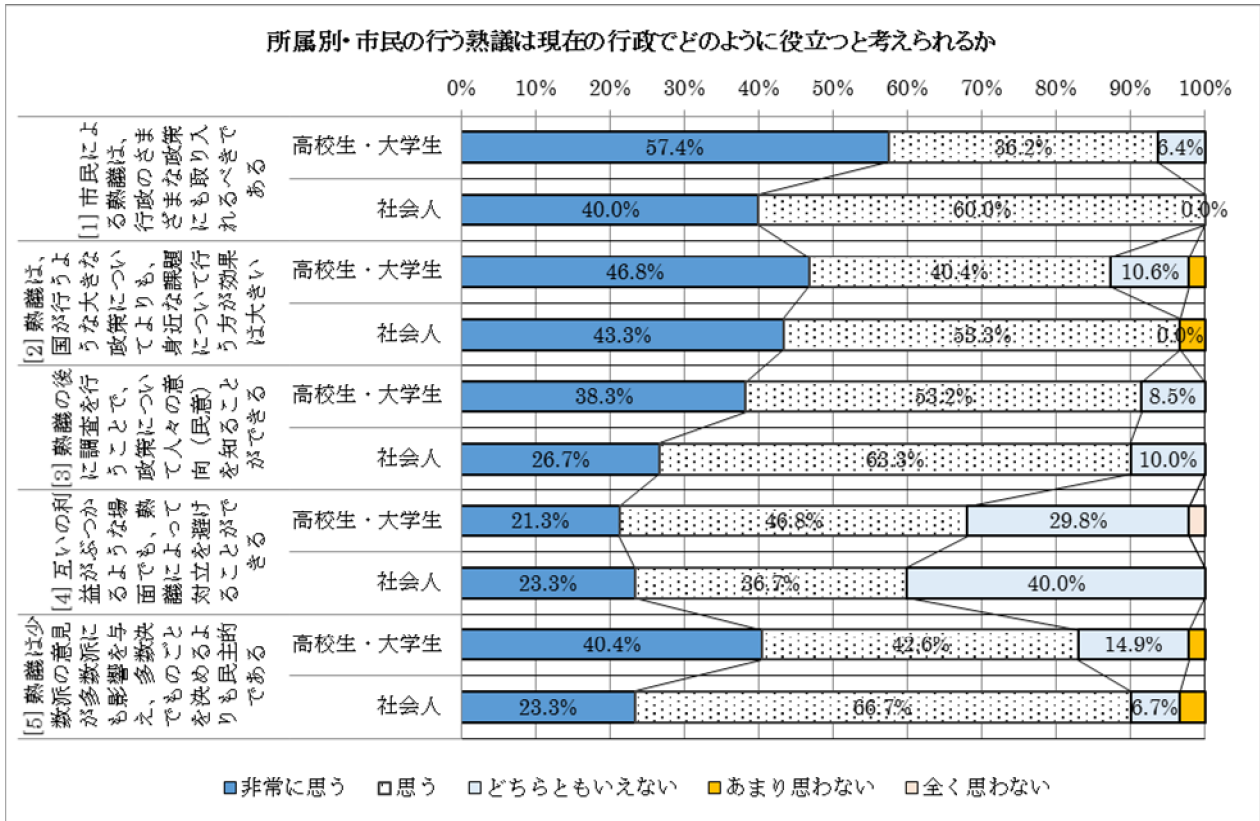


図 4-3-13 所属別・市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」については、高校生・大学生では、「非常に思う」が 57.4%であり、社会人の 40.0%を大きく上回る。社会人では、賛同するが必ずしも強い賛同ではない。同じ項目であっても、「非常に思う」は高校生・大学生で割合が高くなる傾向がある。若年者に熟議への強い期待があることが伺われる他、経験を積んでいる社会人の場合、「非常に思う」と表することが難しい場合も多い。

「互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」については、「非常に思う」が社会人で高いものの、「どちらともいえない」も多くあり、全体の賛同は高校生・大学生が多くなる。逆に「[5]熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数派でものごとを決めるよりも民主的である」は高校生・大学生での「非常に思う」の割合が高いが、「思う」の比率が低く、全体の賛同では社会人が多くなる。熟議の議論の過程に関わることであり、高校生・大学生では議論の過程を重視していることを踏まえると、議論により課題の解決を図ることの期待がある⁴。逆に、「熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」については、高校生・

⁴ 平成 27 年、政治課題となった限定的な集団的自衛権の行使のための法整備に対し、国会へのデモ行進を行った自由と民主主義のための学生緊急行動（SEALS）は話し合いによる国家間紛争の解決を詠い、しばしば非現実的と批判の対象となった。話し合いによる解決への期待が若年者の傾向として高いことが、SEALS が若者に受け入れられた背景にあるのではない。

大学生では「非常に思う」の比率が40.4%と高く熟議への期待が大きい反面、「思う」との合計では、むしろ社会人よりも賛意の比率が低下する。多数決原理による不合理を踏まえ、社会人にも議会制民主主義を補完する意味での熟議を待望する考えがあるのかもしれない。

ここで、回答についての年次変化を明らかにするために、各項目について回答をポイント化する。「そう思う」を2、「思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまり思わない」を-1、「思わない」を-2とし、有効回答数で除したものがポイントである。

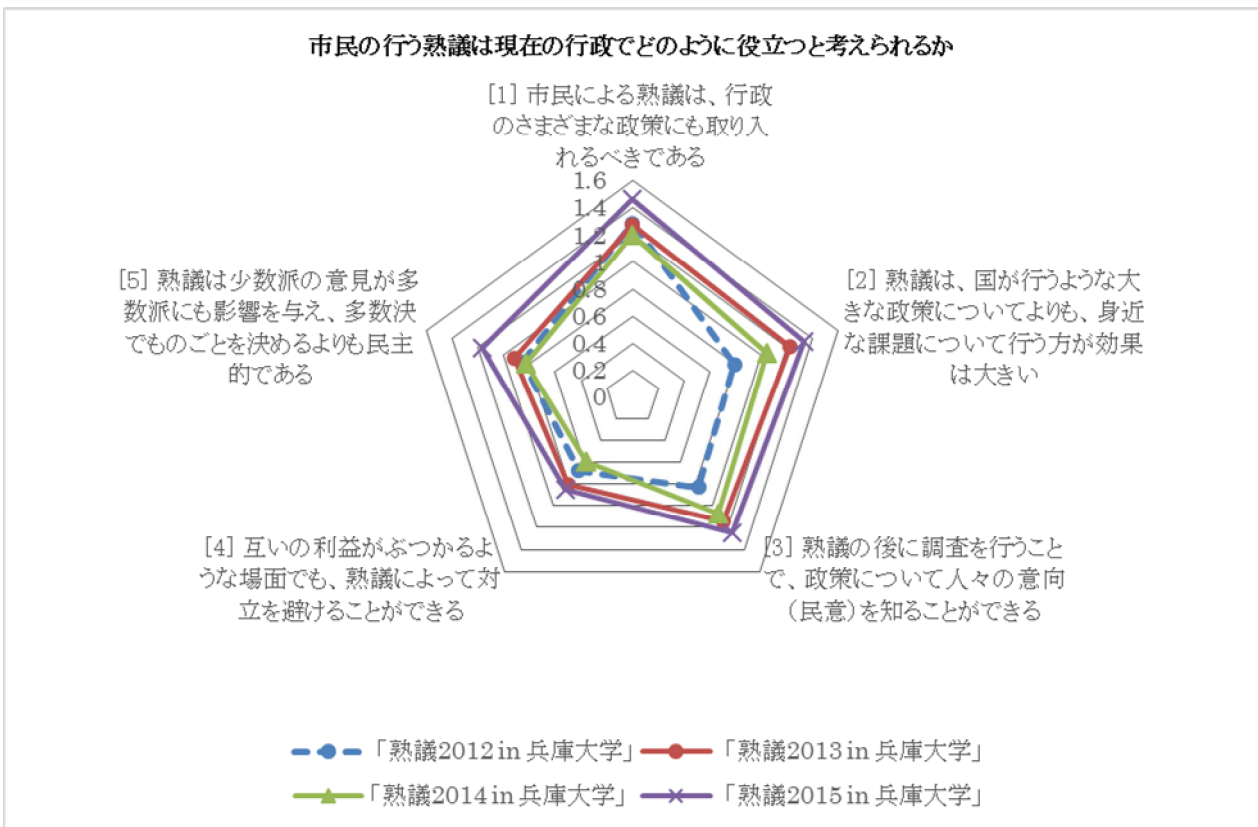


図 4-3-14 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるかの変化 (ポイント)

ポイントの違いを見ると【図 4-3-14】、「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」では、2012年度の値は1.28、以下、1.27、1.20、1.47であり、2012年度から14年度までは1.2前後で安定をしていたが、2015年度に大きくなっている。「熟議2012 in 兵庫大学」の頃から、熟議の必要性が認識されていた。「熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」はそれぞれ0.79、1.22、1.04、1.34と上昇する傾向にあり、地域の課題を考える熟議を通し、地域での適用の有用性を感じる人が増えた。同じく、「熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向(民意)を知ることができる」も、2012年度が0.83に対し、1.14、1.08、1.25とポイントは上昇している。熟議が持つ民主主義における有用性が理解されてきている。「互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」は、他の項目と比べて低い値にな

っている。「熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」は、2012年度から2014年度までは0.85前後であるが、2015年度は1.17と大きくなっている。熟議での満足度が高かった2015年度では、やはりその有用性が高く認識されている。

4. 地域の安心・安全を考える

(1) 将来の安心・安全

熟議プロジェクトチームでは、将来における安全・安心の課題が拡大するか、との検討を行った。「熟議2014 in 兵庫大学」では、現在の安心・安全の認識に基づく議論であったが、「熟議2015 in 兵庫大学」のテーマである、地域のちからを考えるにあたって、将来を見据えての課題との認識を有していた。将来にあつて、人口の減少が明確な中では、安心・安全を維持するため地域のちからへの期待が大きくなると考えられたのである。

最初に、より客観的な視点から、将来において、安心・安全を脅かす要素を明らかにする必要がある。将来に予測される事象には、正と負の側面がある。例えば、人口知能・ロボットの将来の発展は、事業用ロボットの開発による人材不足の解消に寄与する意味で、安心・安全を高めてくれる。しかし、仕事の多くをそうしたロボットに奪われる懸念もあり、就業の安定という安心・安全を支える根幹を失う。そのため「事前アンケート」で行った設問は、将来を予測しうる期間であり、できるだけ未来に、との意図の下、「今から35年後の、2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか。5段階で評価をしてください」との内容である。つまり、2050年における、下記の各種の社会事情が安心・安全に正負のいずれの効果をもたらすか、肯定的な場合（向上する）に5、否定的な場合（低下する）には1を回答する、という方法である。このことはまた、議論の場においては、こうした幅広い安心・安全についての論を語り合い、また将来を見越しての意見交換ができることを参加者に気付かせることも意図されていた。

- | | | |
|----------------------|------------------|-----------------|
| [1] 人口減少(2050年) | [2] 医療(2050年) | [3] 都市(2050年) |
| [4] コミュニティ(2050年) | [5] 経済・財政(2050年) | [6] 技術発展(2050年) |
| [7] 人工知能・ロボット(2050年) | [8] 災害(2050年) | [9] 環境(2050年) |

結果について、5を+2、4を+1、3を0、2を-1、1を-2に換算し、その総合計を有効回答数で除し0を中立とする平均値を算出し、これをポイントとする。項目別の結果を図に示す【図4-4-1】。

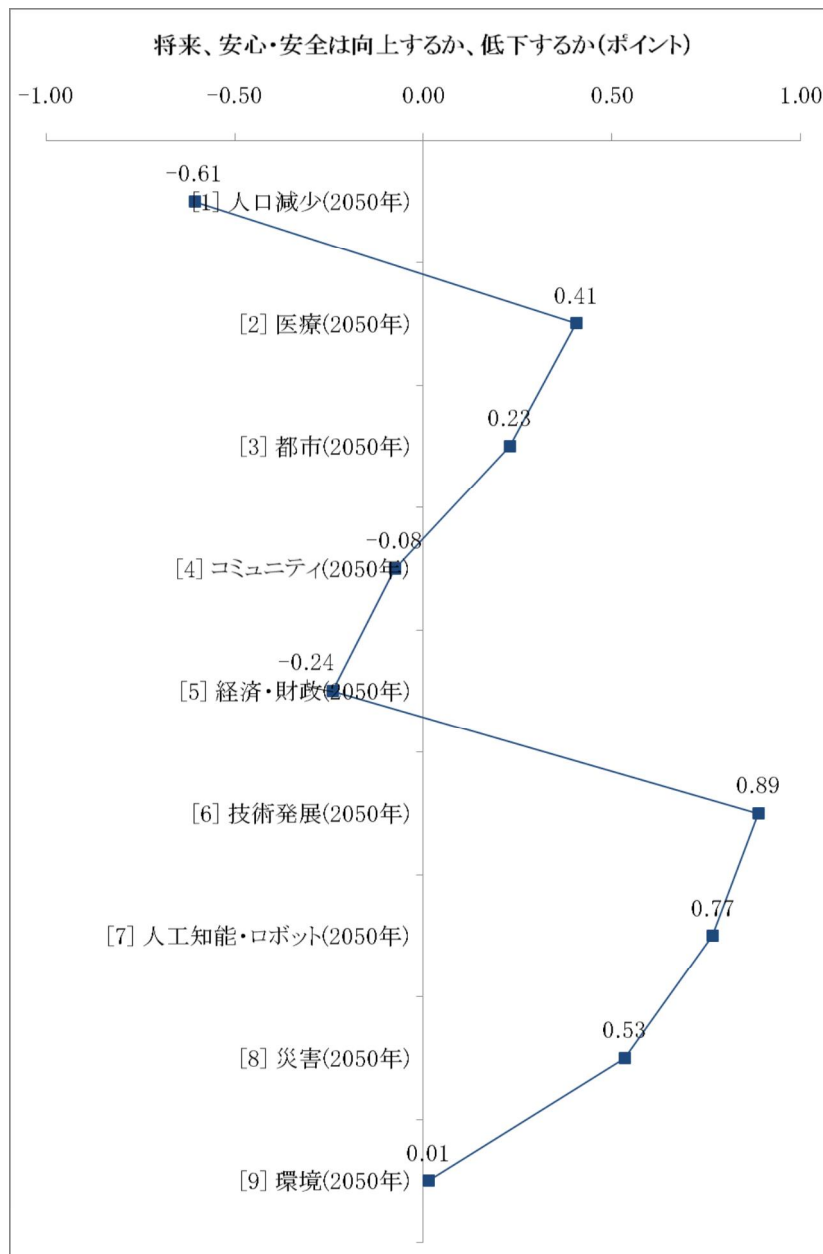


図4-4-1 将来、安心・安全は向上するか、低下するか（ポイント）

医療、都市、技術発展、人工知能・ロボット、災害などはプラスの値である。特に技術発展は0.89と最もポイントが高い。これらの項目には主として技術的なイノベーションを伴い、ハードウェアとそれに付随するソフトウェアの進歩により明るい未来を見せてくれる要素でもある。技術の発展の背後には、負の側面も予測されるのであるが、それ以上に正の面を評価している。医療であれば、将来、医療技術の進歩は病気リスクを軽減させ、安心・安全を向上させるが、医療格差や医療費の高騰などの生活の安心・安全を脅かす可能性もある。しかし、医療という言葉からは進んだ医療への期待が大きいと考えられる。都市も本来評価の困難な項目である。インフラの整備など都市生活の利便性が向上する反面、人口集中による混雑の拡大、非常時のリスクの増大など、都市化に伴ってのコストも上昇する。

一方で、人口減少は、 -0.61 でマイナス幅が大きな項目である。人口の減少は、経済社会の維持の困難をもたらす可能性がある。混雑の解消、環境汚染の縮小など社会的コストを引き下げ、社会の安心・安全を高めることも考えられる。コミュニティ、経済・財政についても負の値を取る。社会にかかる、ソフト的な部分、総ずるならば人に関わる内容については、悲観的ということができる。

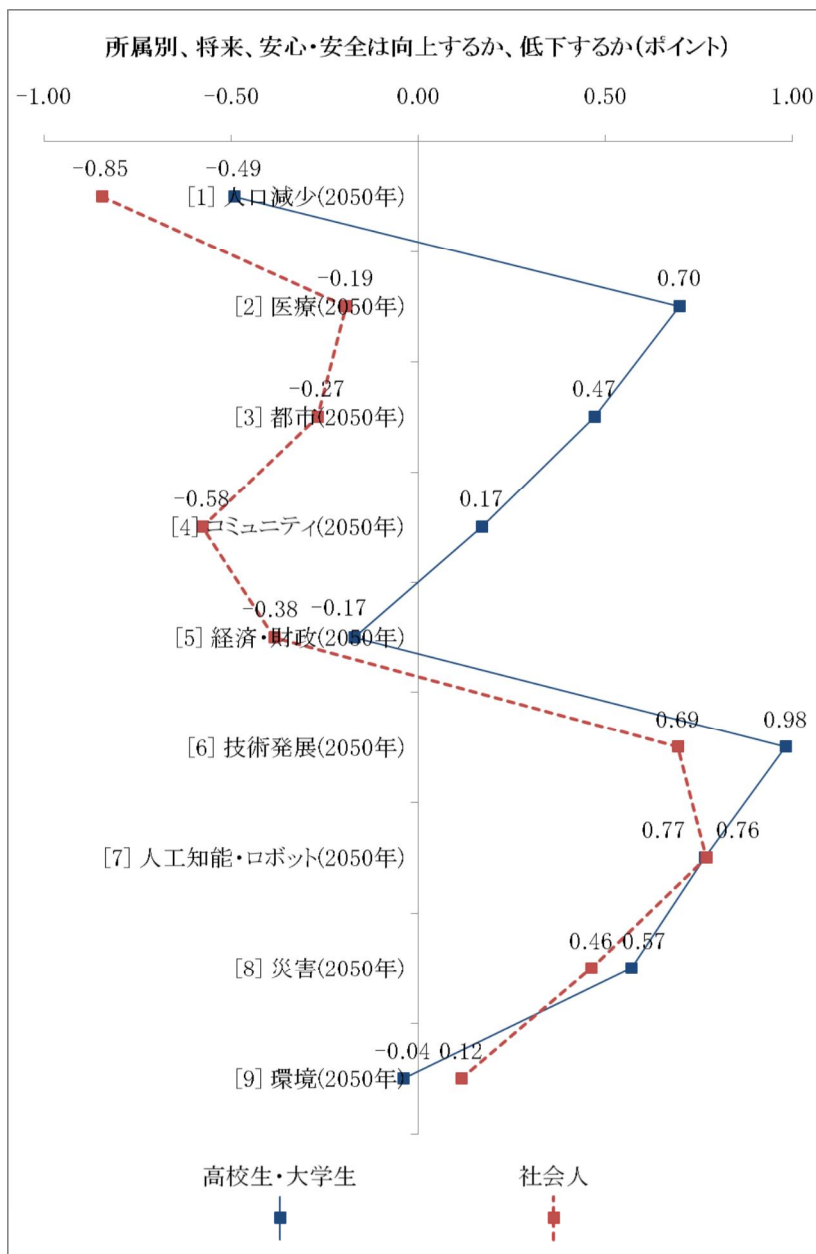


図 4-4-2 所属別、将来、安心・安全は向上するか、低下するか (ポイント)

これを所属別で示した場合【図 4-4-2】、差が大きいのは、医療、都市、コミュニティの項目である。医療については、高校生・大学生が 0.70 と正の値であるのに対し、社会人では -0.19 と負になっている。同じく、都市については、 0.47 と -0.27 、コミュニティについては 0.17 と -0.58 である。医療に

については、医療費負担を抱え、医療機関に頼る機会も多い社会人では、医師、看護師不足などで医療への不安が大きくなっている可能性がある。高校生・大学生の場合、むしろ医療技術の進歩を期待しているのかもしれない。同様に都市についても、社会人の場合、都市生活の経験を持っているため、負の側面も理解し、安心・安全については、必ずしも肯定的ではないのかもしれない。そして興味深い点は、コミュニティについての評価では、社会人ではポイントが若年者と比べて相当に低い点である。若年者の方が、コミュニティへの関心が低く、関わりを持たない生活への期待があると思われており、安心・安全については社会人よりもポイントが低くなると考えられた。にもかかわらず、実際の結果では逆転をしている。社会人の場合、実際のコミュニティでの活動に関与し、その限界を熟知し、また将来においてコミュニティの力が失われることなどを予想して、その衰退により安心・安全が維持できないことを懸念してのものかもしれない。

人口減少については、高校生・大学生のポイントは -0.49 で、社会人 -0.85 よりも上向きになっている。いずれもマイナスであるが、高校生・大学生は人口減少による安心・安全上の利点も理解をしていると思われる。経済・財政の項目も同様の傾向である。負の値ではあるが、やや若年者の方が楽観的である。このように、若年者が将来に対しては比較的楽観的といえる。技術革新については、高校生・大学生の場合、4と回答した割合が47.2%、5の比率が26.4%と肯定的な意見が2/3を占めている。技術革新によつての安心・安全の課題の解決への期待が大きい。人口知能・ロボット、災害、環境などの項目については、高校生・大学生と社会人のポイントに大きな差が見られない。

(2) 地域のちからに対する考え方とその変化

兵庫大学熟議手法では、討議の前後での世論の比較を重視する討議型世論調査の手法を参考に、テーマについて、同じ問いを「事前アンケート」と「事後アンケート」において行う。これにより「熟議2015 in 兵庫大学」を通して、意見がどのように変化をしたのか、を追跡することも可能になる。質問は地域のちからを活用し、地域の安心・安全についての下記の考え方への賛否の度合いを問う内容である。なお、対象とするのは、「事前アンケート」と「事後アンケート」の双方に回答のあった73件である。

- [1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。
- [2] 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。
- [3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。
- [4] 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。
- [5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。
- [6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。
- [7] 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。
- [8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。
- [9] 安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである。
- [10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある。

【図 4-4-3】は、5段階での回答（大いに賛成、やや賛成、普通、やや反対、大いに反対）について、それぞれ 2、1、0、-1、-2 の数字を当て合計し、有効回答数で除して平均値を求めた結果である。

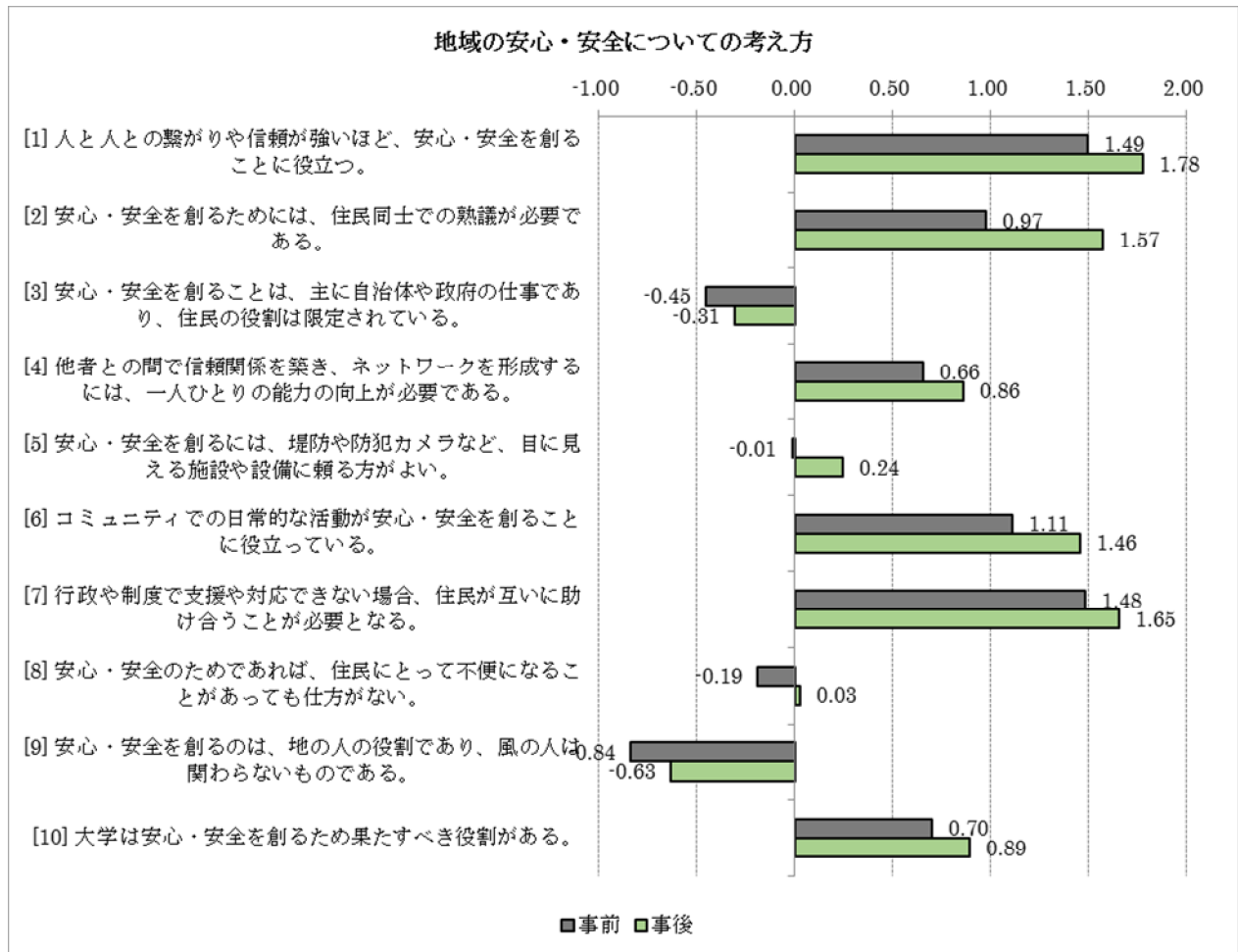


図 4-4-3 地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

項目順に考察を行う。

「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」は、熟議の前までは 1.49 と最も高く、熟議の後には 1.78 に上昇をしている。地域のちからとして、互惠性のあるつながりやネットワークなどを想定しており、熟慮に際しての資料にも用いたが、それらが安心・安全に寄与すると参加者は認識をしており、その思いを、さらに熟議を通して強化したのである。

「[2] 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」は、熟議後に 0.97 から 1.57 に大幅に上昇した項目である。この項目の回答比率の、熟議前後で比較すると、次の通りである。「事後アンケート」では、大いに賛成が 21.9%から、60.3%に大幅に増加している。熟議への満足度とともに、その有用性が確認されたことは既に述べたが、ここでもそれを示しているといえる【図 4-4-4】。

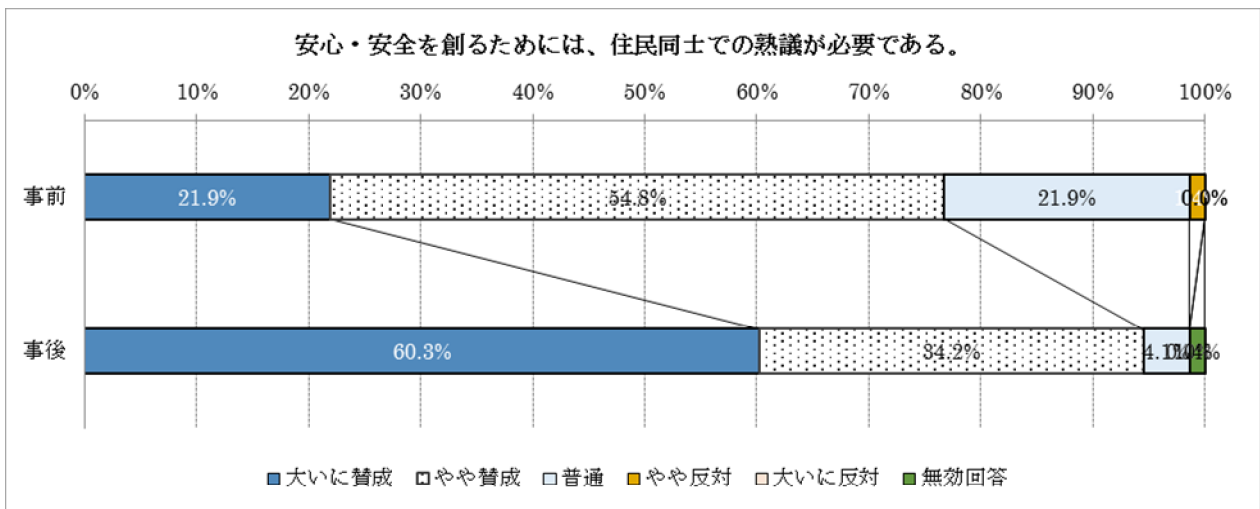


図 4-4-4 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である、の比率

「[3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」については、熟議前には-0.45、熟議後はやや上昇し-0.31 となっている。住民の役割は限定されないと考えの回答者が多い。

「[4] 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」との項目は、自律を重視する考え方に関する質問である。広くは安心・安全のための自己責任に通じる点である。0.66 から 0.86 に事後でポイントが上昇しており、自らがその覚悟と自覚を必要とする、との考えへの賛成が比較的多くなっている。

[5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」については、「熟議 2014 in 兵庫大学」での結論、すなわち防犯カメラ設置・利用への賛同が比較的多くなっていた、という点を踏まえている。事前ではほとんど中立、となっている。「熟議 2014 in 兵庫大学」でも、カメラは必要であるが、その設置、運用への注意が必要である、ということが言われており、賛否を決定しにくい事情にあると思われる。

「[6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」は事前で 1.11、事後で 1.46 である。災害を拡大しない減災につなげるには、いざというときにコミュニティが機能し、支え合うことが必要になるが、そのために互いを知るなどの日常的な活動は不可欠である。これは減災のための活動を地域に「埋め込む」ことになる。熟議後にポイントが上昇している点は、議論等を通し、コミュニティのちからが再確認されたと考えられる。

「[7] 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」に対しては、事前で 1.48、事後では 1.65 と高いポイントとなっている。1995 年の阪神・淡路大震災では、行政でできる限界以上の支援について、ボランティアが大いに活躍、その後もボランティアが力を発揮してきた。東日本大震災では、ボランティアの他に住民によるコミュニティの強さが注目された。このように公助に頼るだけではない、共助の重要性を多くの人が認識をしている。

「[8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」との項目は賛否の分かれるところである。911 テロ以降、激化するテロリズムや中東の不安定化に伴っての多数の難民の流入、グローバル化が進むゆえに自由が高まる以上に脅かされる安全、といった課題が突きつけられている。市民の自由と安全の適切なバランスはどこにあるのか、の疑問は各国で共通している。そうした現状からか、賛否が拮抗することは十分に考えられる。実際、回答比率を見るならば、「事前アンケート」では20.5%が賛成に、39.7%が反対との意見であった。反対、つまり自由を守ることが重視されている。しかし、事後では、賛成が32.9%、反対が28.8%とわずかに逆転する結果となっている。議論を通し、近隣での軽犯罪や事故を防ぎ、あるいは災害時の強靱性のために、一部の利便性が制約される事情があることが理解された可能性がある【図4-4-5】。

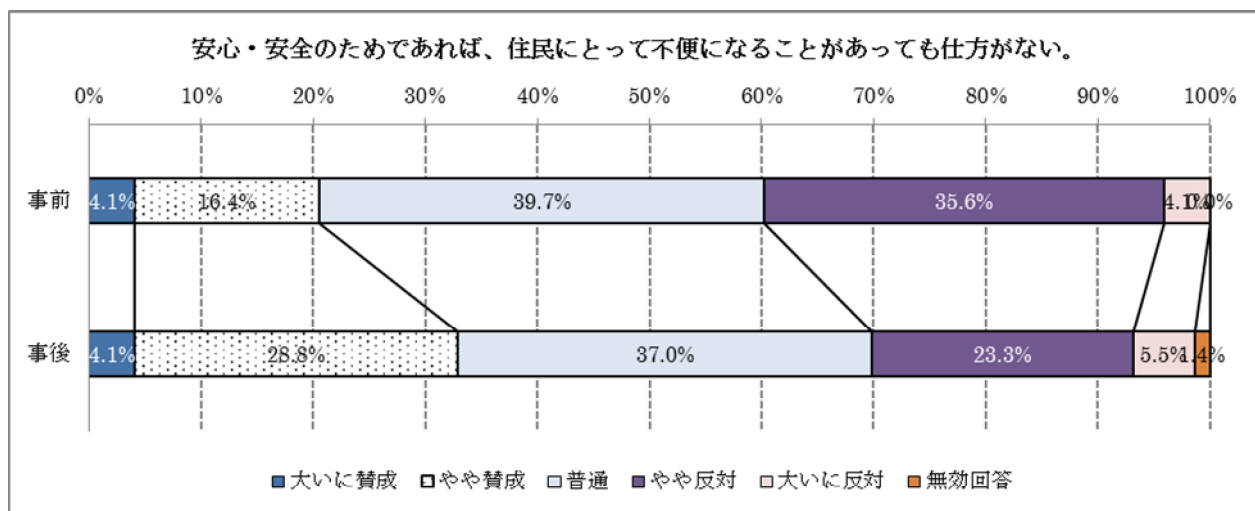


図4-4-5 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

「[9] 安心・安全を創るのは、地の人役割であり、風の人関わらないものである」については、昨年度の「熟議2014 in 兵庫大学」において取り入れた課題に立脚する。それは次のように定義されていた。

「地の人」とは地域活動を支える基礎になる人々で、長く住み、地域にネットワークを持って活動し、地域の変化にも敏感である。地の人には、長い歴史と伝統が蓄積されており、それらを熟知している強みを持つ。また「風の人」とは外から地域に文化をもたらし、考え方をもち活動をする人々で、外から地域に訪れ、その地に魅かれている。外にある変化を捉え、その地域にある頑なな考え方や心情をときほぐす役割を果たす。

地元コミュニティに密着し、地域に構成される多層的なネットワークに関わる「地の人」と地域には根ざさない、しかしその地の魅力を知る「風の人」との関係に対する意見を確認するものである。熟議

の前では-0.84であり、反対する人が多く、事後も-0.63である。つまり、地の人の役割の大きさを認識しつつも、風の人も関わりを持ちながら、地域の安全・安心を形作ることが必要との認識である。

「[10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」は、事前で0.70、事後で0.89となっている。熟議の後にポイントが上昇しており、学生も参加する議論の中で大学の役割が指摘された可能性がある。ところで、同じ設問を安心・安全をテーマに実施した「熟議2014 in 兵庫大学」でも行った。その際のポイントは、事前で0.69、事後で0.91となっている。つまり、今回とほぼ同様の結果であった。メンバーが異なり、年度も異なる熟議で、類似する結果が出たことは、大学が地域で一定以上の役割を果たすことへの期待が広く認識されていることを示すものである。

次に、所属別での比較を行う。【図4-4-6】に高校生・大学生の、また【図4-4-7】に社会人の、地域の安心・安全についての考え方についての、事前・事後でのポイントを示す。

所属別での相違点について触れる。

「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」については、社会人のポイントが、事前、事後とも高校生・大学生を上回っており、社会経験の差があると思われる。

「[3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」については、高校生・大学生では、事前-0.28、事後-0.13、社会人ではそれぞれ-0.77、-0.64であり、社会人で反対側へのポイントが高くなっている。高校生・大学生では、将来的にコミュニティーの役割が大きいことを理解しているが、現状、自治体や政府の役割への期待も持っている

「[5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」をみると、高校生・大学生では、事前で0.13、事後で0.43と正の値になっているのに対し、社会人では-0.27、-0.13とマイナスとなっている。つまり、高校生・大学生では、社会人と比較してハードウェアに依存することにそれほどの抵抗はないと思われる。

「[6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」について、興味深い点は、高校生・大学生において、ポイントが0.93から1.40へと事前・事後で大きく上昇した点である。熟議を通し、コミュニティの活動を認識するようになったといえる。政策合意を求める中では、参加者の意識が重要となるが、この結果は、熟議がその可能性を大いに秘めていることを示している。

「[8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」では、高校生・大学生が、事前で-0.43、事後で-0.09とマイナスを、社会人では0.23、0.24とプラスである。高校生・大学生は不便となることに否定の観を抱いている。興味深い点は、高校生・大学生と社会人とで、回答の比率の、熟議前後での変化に相違が見られる点である。【図4-4-8】に高校生・大学生の、また【図4-4-9】に社会人の、安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率を示す。

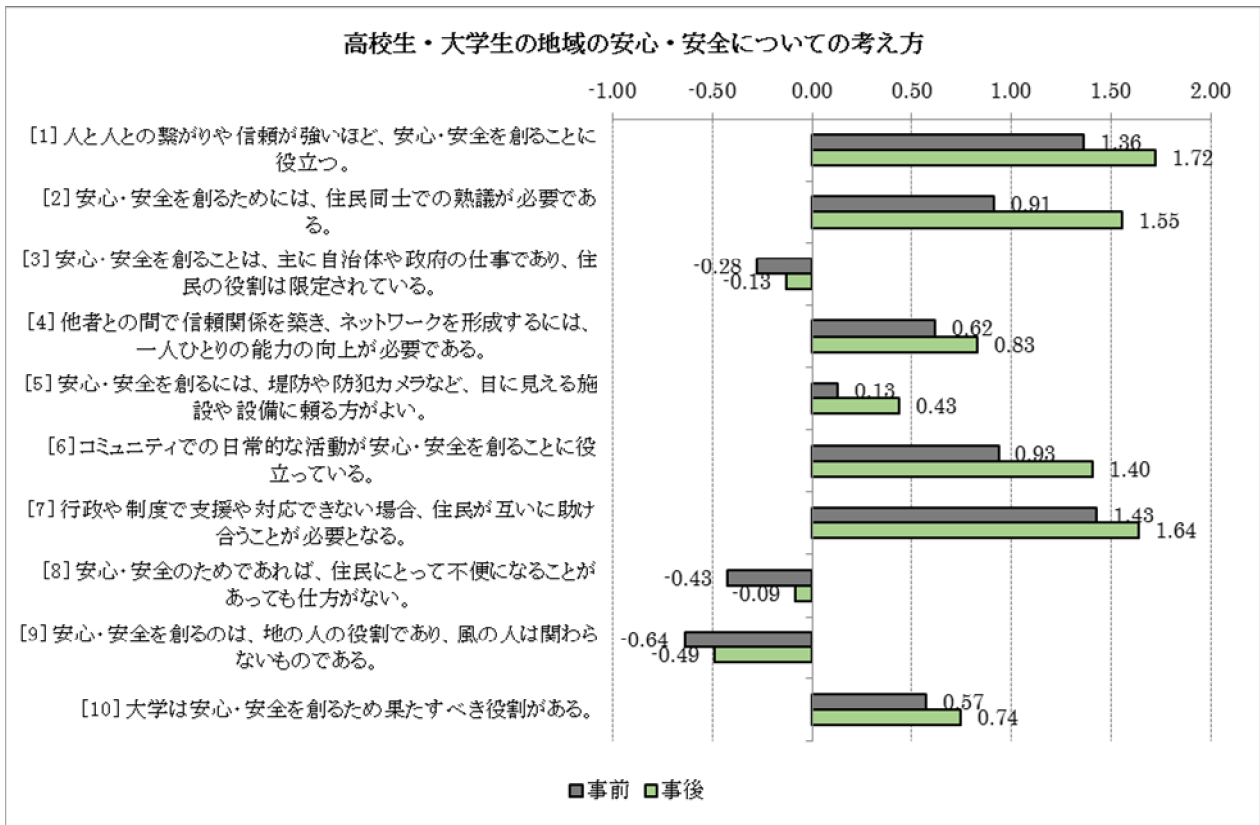


図 4-4-6 高校生・大学生の地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

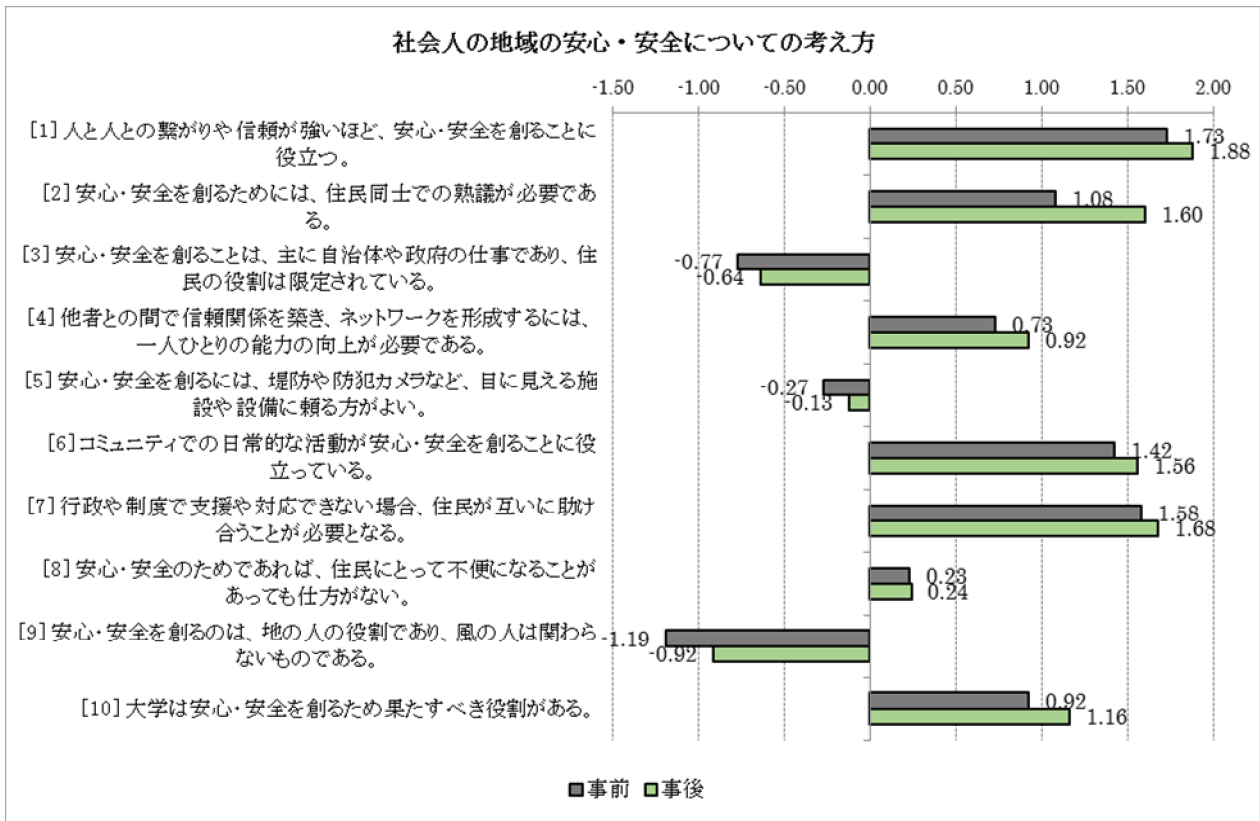


図 4-4-7 社会人の地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

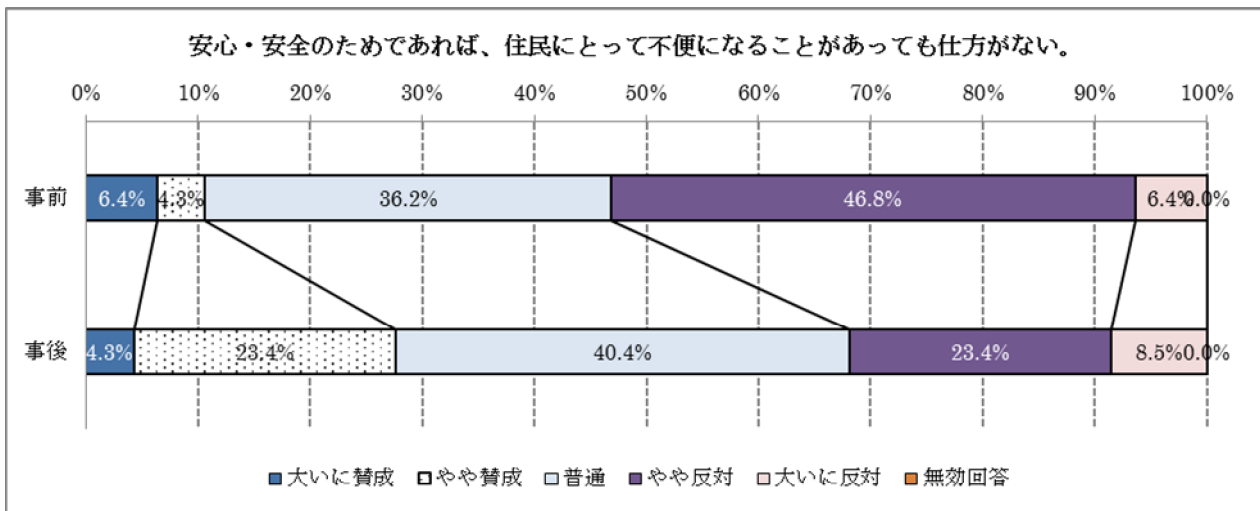


図 4-4-8 高校生・大学生の安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

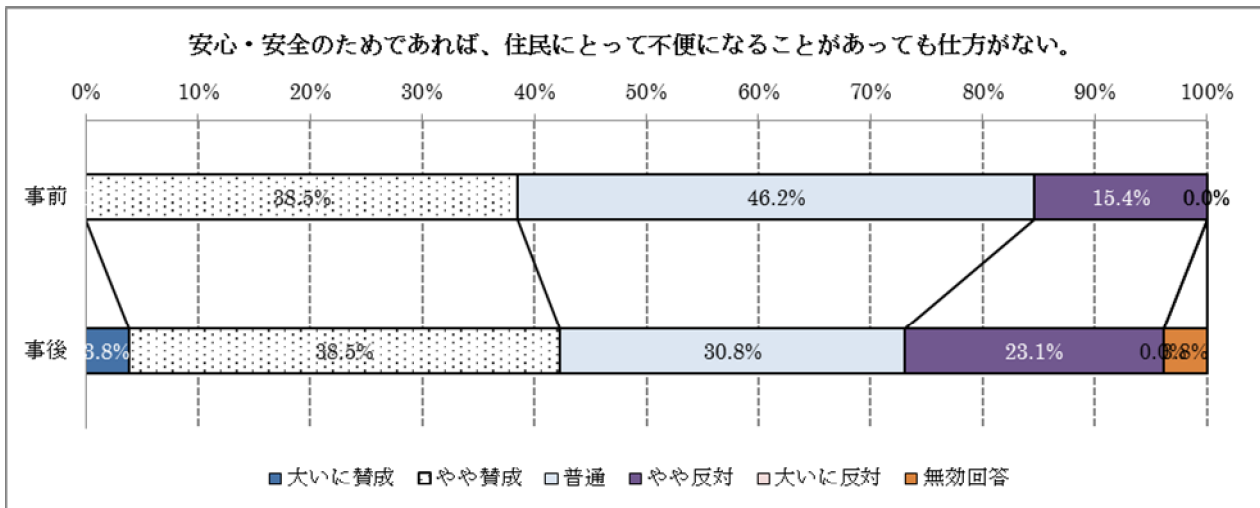


図 4-4-9 社会人の安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

高校生・大学生の場合、議論の後、やや反対の比率が半減しており、一方で、賛成は 4.3%から 23.4%に大きく増加をしている。議論の中で、社会人の方から、地域の利便性が一部制約されることも致し方ない、との事例などを聞いたのかもしれない。一方、社会人の場合、やや反対が 15.4%から 23.1%にまで増大している。ポイントには大きな変化がなかったものの、議論により、反対も増えていたのである。高校生・大学生との議論により、考えが変化する人も少なくなかったのではないか。

「[9] 安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである」については、高校生・大学生は-0.64、-0.49と負の値、つまり反対ではあるが、その数値は社会人の-1.19、-0.92よりも高くなっており、風の人への期待がやや小さいと思われる。むしろ、若年者が風の人への期待が大きいであろう（つまり、ポイントのマイナス幅が大きい）と考えていたため、その仮説とは異なる結果である。しばしば、地域に変革をもたらす人々に「若者」「ばか者」「よそ者」の三者を挙げる。風の

人はよそ者であり、それらは若者と一緒になってイメージされる。風の人へ高校生・大学生の方が、大きな期待を抱くとは、そのイメージに拠るものである。しかし、実際に三者がどのように関わり、役割を分担するのか、連携をするのかは必ずしも言及されない。地域の側の、改革への思い込みでもある。高校生・大学生が地元だけではなく、風の人と接する機会を設けることも課題かもしれない。

ところで、「[10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」については、高校生・大学生よりも社会人の方が、ポイントが高い。大学の地域での役割をもっと若年者に PR をしていかなければならないのであろう。もちろん、熟議はその有用なツールである。

(田端和彦)